

もう一つの戊辰戦争 江戸民衆の政治意識をめぐる抗争 その1

奈倉哲三

Another Boshin War : Feud over Political Awareness of Common People in Edo, Part I
NAGURA Tetsuzo

はじめに

序 民衆の政治意識形成と幕府法支配の崩壊(二月中旬まで)

①『太政官日誌』と『中外新聞』と藤岡屋情報(三月上旬まで)

②江戸開城をめぐる(四月十四日まで)

③大総督宮入城と江戸(四月二十一日まで)

結 戊辰戦争第一期、江戸市民・民衆の意識をめぐる抗争の特質

【論文要旨】

戊辰戦争期に江戸で生活していた多くの市民・民衆は、東征軍による江戸駐留に対して拒否的な反応を示していた。「新政府」は江戸民衆のそうした政治意識を圧殺・再編せざるを得ず、両者の間で激しい抗争が展開される。この抗争は、新旧両権力間で展開している戊辰戦争とは異なる、もう一つの戊辰戦争である。本稿は、このもう一つの戊辰戦争を、民衆思想史の視点から解明したものである。ただし、本稿は正月十二日慶喜東帰から四月二十一日大総督宮入城までに限定し、その間に江戸民衆の眼前で生じた事象を分析し、江戸民衆の意識・思想をめぐる抗争の特質を解明した。

旧幕府諸勢力の動きは多様であったが、小諸藩主牧野康済の歎願書は際だっていた。ひたすら、臣子として徳川家に仕えることで朝廷に仕えるのだ、との論理一つを主張、朝命だからとて慶喜追討の兵は出せないと突っ張り、出兵拒否で「朝廷の関失を補う」とまで直言した。この論理が大総督宮入城当日に、江戸市民の眼前に示されていた。

一方、東征軍の江戸入り総過程を通じ、江戸市民の負担は急激に膨張する。それにより「万民塗炭之苦」を朝廷が救うとの論理は破綻し、「天子之御民」は空語となる。

江戸町民は、東征軍入城によって下層民にまで負担が及ぶ状況の改善を町奉行所に提出、入用が嵩んだ四月五日には町人惣代九十余名が歎願書を先鋒隊宿所に提出した。

他方、柳河春^{しゅうか}三は二月下旬以来、「新政府」嫌悪を根底に据えつつも軍事的抵抗は無益とし、外国交際と言論を重視する市民派新聞『中外新聞』を発行し続けていた。

この市民派新聞が背景の力となって、四月二日、江戸町奉行佐久間鑄五郎^{はんごろう}は市中困窮人への御救米支給を決定した。統治権の委譲を目前にして、新権力へのギリギリの抵抗として、市民・民衆の側に寄り添う政策を打ち出したのであった。

以上が、この時期江戸市民・民衆の意識をめぐる抗争の特質である。

【キーワード】戊辰戦争、江戸民衆の意識・思想、市民派新聞

はじめに

王政復古クーデタにより、天皇權威を占有することに成功した薩長二藩旧下士層を核とする京都討幕派グループ（以下、これを「新政府」と記す）は、二百数十年の長きにわたって幕府が本拠地としてきた江戸とその地に生活していた民衆を、どのようにして自らの統治下に組み込んでいったのだろうか？ こうした間、戊辰戦争下における江戸支配の転換問題について研究したものはまだ多くはなく、とりわけ江戸民衆の意識・思想をめぐる対立・抗争に焦点をあてたものはみられない^①。

筆者は先に、戊辰戦争期に江戸で生活していた多くの市民・民衆が、「新政府」の繰り出した東征進駐軍の江戸駐留に対して、拒否的な反応を示していたことについて、多数の戊辰戦争諷刺錦絵から解明した。この拒否的反応の内には、京都の天皇を薩摩の傀儡とみたり、薩摩傀儡の天皇による江戸親征を予測し、親征忌避の感情を表したもののさえあった。それらの諷刺錦絵に集約的に表明された江戸民衆の政治意識は、日本の民衆がかつて経験したことのない高度なもので、かつ、江戸という限られた空間内にせよ、かつてなく広範な身分にまたがるものであった^②。

だが、そうした意識を有し、天皇を「きんちゃん」と呼称していたような江戸民衆を、現実^③に「天子之御民」（江戸入城にあたり、四月十日、東山道総督府参謀が市中に触れ出させた触達中の文言）へと編成していく過程こそが、江戸を東京へと編成する一環でもあった以上、さらには、やがてその東京に天皇を君臨させ、あらたな《都》とすることが日本の「御一新」にとって不可欠な要素なのだと決定する以上、戊辰戦争諷刺錦絵に集約された江戸民衆の政治意識は、「新政府」が目指す「天子之御民」づくりのイデオロギーにとって、著しく不都合なもの、断固として排除されるべき性格のものであった。

従って、天皇を「きんちゃん」呼ばわりし、東征軍の江戸駐留を忌避するような民衆の政治意識に対して、「新政府」はその圧殺・再編を意図せざるを得ず、両者の間で激しい抗争が展開されるはずである。

この抗争は、まずは戊辰戦争期間中にその序盤戦が展開され、その後も長期にわたって民衆の意識・思想をめぐる展開される、近代日本の社会的政治抗争となっていく。序盤戦の抗争は、新旧両権力間で展開している戊辰戦争と密接に連関しつつも、「佐幕」か「勤王」かといった次元では決して分別し得ない、別土俵の、もう一つの戊辰戦争である。

本稿は、この、民衆思想をめぐる近代の社会的政治抗争の序盤戦たるもう一つの戊辰戦争を、江戸に絞って解明することを目的としている。

具体的には、一、戊辰戦争諷刺錦絵に集約された江戸民衆の政治意識は如何なる情報を得て形成されたのかについて考察する。特に前著で活用した町触に加え、藤岡屋由蔵の流す情報や、江戸で発行された『中外新聞』『内外新報』などの市民派新聞と、京都「新政府」が発行し後に江戸でも合綴刊行される『太政官日誌』（ただし、「その1」の本稿では対象外）などの木版刊行物を検討すること。二、江戸民衆に対する新旧両権力による法支配・軍事支配がどのように展開したのか、それらを含め、内乱状況を木版刊行物はどうのように報じたのかを把握し、江戸の全社会的規模で展開している政治抗争の構造的特質が、江戸市民・民衆の政治意識形成に如何に反映するのか、その思想的特質を江戸市民・民衆の目線で捉え解明すること、以上二つを目的としている。

勿論、この考察にあたっては、慶応四年正月の鳥羽・伏見戦争勃発から、翌明治二年五月の箱館戦争終結にいたる、全戊辰戦争期を直接的な対象としなければならない。が、本稿では、準備と紙幅の関係から、まず「その1」として、慶応四年四月二十一日の大総督宮入城までを直接の対象とせざるを得ない。本稿に引き続いて、明治二年五月箱館戦争終結までについても、何度かに分けて執筆を予定している。

序 民衆の政治意識形成と幕府法支配の崩壊（二月中旬まで）

封建的な法支配を貫徹するための町触が、幕末にいたり、結果的に江戸庶民の政治意識を高揚させた点については、前著で詳しく述べたが、本論の展開に必要であるので、以下にその概略を記し、序とする。

「異国船渡来」への対応は、天保期には老中から幕府諸役人へ通達されていたが、町触として出ることはなかった。だが、いよいよ現実となると住民にも対応を要求せざるを得なくなる。嘉永二年十二月にイギリス船の浦賀と下田渡来を伝え、「町中不洩様」徹底周知したことに始まったこの種の町触は、ベリー来航のときに一挙にエスカレートし、異国船が内海へ乗り込んだら早半鐘を町々端々まで打ち継ぎ、火消人足は詰め所へ参集せよなどの町触となつて徹底周知される。生麦事件の賠償問題が暗礁に乗り上げ、あわやイギリスと戦争かという文久三年三、五月は一段と緊迫度が増し、特定地域の老若病者に立ち退きまで命じた。⁽⁶⁾

戦争勃発という国家的危機を、長屋の住民に至るまでの民衆に、権力が直接周知させるという、日本史上初めての事態が訪れたのである。

一方、文久元年十月に孝明天皇の妹和宮親子内親王が將軍家茂の正室となるべく下向、十一月に中山道板橋宿から清水館に、十二月に清水館から江戸城に牛車で入る。このとき、従来の將軍正室の輿入れにはなかった、横小路の板囲い、火の見半鐘の取り片付けなど、迎への体制が町触によって徹底周知され、今まで漠然としていた「朝廷の權威」が、江戸民衆の眼前に現れる。また、慶応二年十二月末に孝明天皇が急死し、翌年正月に江戸中に普請鳴物停止令として周知された。⁽⁸⁾ 將軍や幕閣などが死去した際には普請鳴物停止令が必ず出たが、天皇の場合、江戸ではこれ以前は三例のみで、停止期間も僅か五日間でしかなかった。⁽⁹⁾ だが、孝明天皇死去の際には百日間にも及んで徹底周知され、江戸民衆のほと

んどすべてが「主上」の特異性を認識することとなった。

こうしたこと以上に重大なことは、権力内部の抗争を町触で徹底周知した結果、民衆の政治的関心が一挙に高まったことである。封建体制において、支配階級内部の政治抗争を民衆に知らせることは本来はあり得なかったが、ことが内乱的狀況にまで立ち至ったために、幕府が敵を明示し、民衆を味方に組織する必要が生じ、周知徹底したのである。

最初が元治元年七月、禁門の変に関する町触。江戸に情報が入つてすぐの二十六日に、長州藩二屋敷を没収する、藩士が市中に潜むかもしれないので見廻りを嚴重にせよ、と申し付けた。⁽¹⁰⁾ 八月四日には、長州残党が市中に潜伏しているので嚴重に捜査せよとの町触が「借家店借裏々」の最下層まで徹底周知され、八日には、長州藩邸二カ所を取り壊すために、七千人もの鳶職人が募集された。⁽¹²⁾ 第二次長州征伐では、慶応元年五月に將軍留守の江戸を町民で守る体制が細々と進められ、翌二年七月に、長州・防州所々で戦闘があつたことを町触で知らせ、市中非常態勢強化を命じ、同月に歩兵の募集が触れ出され、応募民兵が配置に付く段にまでいく。⁽¹⁵⁾ これらは家茂の死去によって中止となるが、江戸の町民が幕府民兵として組織されたことは、政治意識を飛躍的に高める契機となった。

一方、大政奉還の上表と王政復古の宣言は町触によつては何も知らされていらない。その間、別の問題が町触によつて周知されていた。慶応三年十月晦日の町触は、最近江戸市中で抜き身の刀やピストルを持った盗賊が押込み、騒げば殺すぞと威して金銭を奪い取る事件が相次いでいるとし、警戒を呼びかけている。⁽¹⁶⁾ 幕府を挑発して戦争に引きずり込むために、薩摩藩が江戸市中や関東各地で働いた強盗行為である。十一月二日には関東浪人を使つた薩摩藩が犯人であると断罪し、薩賊を微塵にすべし、との張り紙が京橋南伝馬町に出され。⁽¹⁷⁾ さらに十二月六日夜には、三十人ほどの「薩摩言葉」を話す賊が自身番屋で一人を鉄砲で撃ち殺し、駆けつけた幕府撒兵隊の内二人を撃ち、一人が即死するという事件が起

きている⁽¹⁸⁾。これらの結果、十二月二十五日に起きたのが、江戸市中警護にあたっていた庄内藩兵や上山藩兵などによる薩摩藩邸焼討事件であり、幕府は同日中に町触を出し、藩邸焼却後、残党が市中に潜伏していることは必定であるから探索を徹底的に行うように、と命じている⁽¹⁹⁾。

大坂に居た慶喜が、こうした島津忠義と家臣の罪を記した「罪状」と、薩摩を討つことを朝廷に願う「討薩表」を提出する予定であったことは従来からよく知られていた。だがこの「罪状」と、それに続く独自の文言が江戸市民に周知されたことは、今まで論じられていなかった⁽²⁰⁾。

十二日の町触では「罪状」に続き、鳥羽・伏見の戦闘は「奸賊共」が理不尽に発砲してきたために起きたのだ、と説明し、薩賊余党がなお江戸市中に潜伏している可能性があるので見つけ次第打捕り誅戮するよう命じている。しかもこれを町々家持借家店借裏々まで洩らさずに申し聞かせよ、と徹底的に命じたのである⁽²¹⁾（以下「薩賊誅戮町触」）。

町奉行所は、十二日に慶喜が西丸に帰り着くと直ちに「上様は御都合もあつて機嫌良く還御された」という触を名主中に出した⁽²²⁾。もともと、城内が勃発情報を得たのは慶喜到着以前の九日であり、その時以来対薩摩全面戦争を覚悟していた勘定奉行小栗忠順らに対し、帰城した慶喜が「忠義家来共が通行を妨げ、突然発砲してきて戦争になった、これは薩摩家来の所業であり、《朝敵》の名を負わせ、他藩を煽動したため戦況は不利となった」という「上意の書付」を示した⁽²³⁾。これを得て、「薩賊誅戮町触」を出すことが決まったものと考えられる。

ここに新たな町兵取立の動向が始まる。「薩賊誅戮町触」を出した翌十三日朝、町奉行所は月行事等と呼び出し、町火消を町兵に組織する方針を提示した⁽²⁴⁾。だが、頭取が町兵を差配する案などについて町人側が「迷惑」を申し立てたため、夜八時頃まで丸一日次善策を検討。その結果、頭取に代わり番組人宿肝煎が町兵差配役を担うことで決着、大筋は当初案通り、町火消三分の一ずつに「炮術」稽古を順繰りにさせ、最終

的に火消全員が「業」を身につけるなどの計画が、町火消組々総代からの伺書の形をとって触れ出され⁽²⁵⁾、この完成が二十七日まで追求される⁽²⁶⁾。

こうして正月下旬まで、火消を町兵に組み入れ、薩摩と全面対決する方策が、町人の意見も入れて練られ、町触として周知徹底されたのである。

だが、二月になると「薩賊」との戦闘態勢作りは雲散霧消する。代わって、慶喜が朝廷に恭順の姿勢を示すのだ、上野寛永寺へ移るなどといった、庶民には何故かは判らないものの、しかし重大事変であることだけは判る、至つて不安な町触が相次いで出されることになる⁽²⁷⁾。

決定的な知らせが二月十四日に出、翌日に下方に伝わる町触である。そこには慶喜自身による朝廷への謝罪・謹慎の奏聞状がそのまま知らされ、その奏聞状を提出し上野寛永寺へ退いて謹慎する、と告げられていた。その後には、朝廷に対し「恭順之道ヲ取失わさる様可致候」とか、「多人数之中には、心得違ふもの」がいるかもしれない、等とあつた⁽²⁸⁾。

つい先日まで、町兵を取立てて薩摩と戦闘する態勢を固めていたのに、その薩摩に対して抵抗することは「心得違い」だといふのである。さらに「何卒官軍御差向之義は暫時御猶予被成下」と、慶喜が薩摩・長州軍を「官軍」と呼び、江戸への進軍中止を歎願していることも周知される。一ヶ月前には、幕府が「薩賊」「奸賊」と罵倒していた者たちが、俄に「官軍」となり、江戸に向かって進軍するというのである。

こうして、市民は何とも承服しがたい、非常に混乱した状況に晒されていく。ここに至るまで、町触を通じ、幕府と薩賊との対決に、自分たち市民自身が組み込まれるべく動かされてきたのに、それが一気に崩れたのである。幕府による法支配が音を立てて崩壊してゆく過程の体験である。と同時に、もしも強盗行為を指揮していた薩摩藩が「官軍」の中心にいたのであれば、そんな「官軍」による新たな支配などはとうてい受け入れがたい、というのが、大多数の江戸市民の気持ちとなったことも間違いないことである。以上、本論のための序である。

①『太政官日誌』と『中外新聞』と藤岡屋情報(三月上旬まで)

1 『太政官日誌』の発刊と江戸

二月十四日の町触により、正月下旬まで進められていた薩摩との対決態勢が完全に消え去り、江戸庶民に対する幕府法支配の根幹が崩壊しつつあるとき、京都「新政府」の足下でも、政権成立の前提を揺るがす動きが相次いで起きていた。「新政府」を内部から支えるべき藩兵が引き起こした二つの攘夷事件、正月十一日の神戸事件と二月十五日の堺事件である。そして、この二つの攘夷事件の衝撃を機に、京都「新政府」太政官代が発刊したのが『太政官日誌』である。

従来、『太政官日誌』は江戸で発行されていた佐幕派系の新聞、『中外新聞』などに対抗するために発行された、といった説が出回っていたが、両者の前後関係だけからみても、それはまったくの誤りであり、これらの攘夷事件、とりわけ堺事件が直接的契機であったことについて、拙稿で詳細に明らかにしておいた。⁽²⁹⁾ 従って『太政官日誌』発刊の目的についてはここでは再論せず、結論だけを記しておく。

それは、予定している親征発都の前に、何としても実現しなければならぬ、天皇の外国公使に対する会見を目前に控え、外国との公式接触の久しく無かった朝廷で、天皇が紫宸殿に外国公使を迎えるということは、まさしく重大事である――、これ以上の攘夷行為が「新政府」軍内部から発生すれば、「大君」権力に代わる権力として諸外国に公認してもらった最後の「詰め」が極めて危うくなる、との危機意識から発意されたものであり、攘夷行為禁止の周知徹底を計ることこそが、『太政官日誌』発刊の直接目的だったのである。

『太政官日誌』(板元は京都書肆村上勘兵衛)の刊行目的に、江戸近郊

の民心支配が視野に入ってきたのは、三月十五日過ぎの第六号が最初であり、さらに四月十日過ぎの第九号に、明確に江戸住民の意識支配をも含意した「発刊布告」を掲げたのであったが、関東各地が始まった旧幕府諸勢力混成軍による激しいゲリラ的抵抗戦のため、遂にその目的は果たし得ず、次々と、「賊徒殲滅」「忠魂称賛」を正面に掲げて戦意高揚を煽る軍事刊行物へと矮小化され、各道諸藩軍を統括するための、あるいは広く言ってもせいぜい「新政府」恭順諸藩とその藩士らを統括するための、政府内軍事機関紙へと変貌を遂げていくのである。⁽³⁰⁾

さらに、江戸庶民の意識形成にとって重要なことは、この『太政官日誌』は、この時点では江戸ではまだ刊行されていないことである。

現在、最初の江戸刊行がいつかを調査中であるが、第十二号までを合綴し、五月中旬頃に『江城日誌』の刊行宣伝を裏表紙見返しにすり込んで和泉屋市兵衛が刊行したものが、早い例として確認出来るもので、後に須原屋茂兵衛も合綴版刊行に加わることが判明している。⁽³¹⁾ これより早い時期の刊行本がある可能性を否定は出来ないが、四月中旬以前の江戸で、『太政官日誌』が刊行されていなかったこと自体は動かし難い。

ただし、情報自体は多様なルートで入って来ている。東西の書肆、京都の村上勘兵衛と江戸の和泉屋市兵衛・須原屋茂兵衛らは、書肆仲間を通じ連絡は恒常的にあつたし、とりわけこの時期は書肆に限らず、江戸の知識層は西の情報入手に必死で、四月には柳河春三⁽³²⁾が『太政官日誌』八号までを手に入れているし(次章②―4参照)、記事のみが伝わって行くこともあつたであろう。また、戊辰戦争諷刺錦絵を刊行し始める絵双紙屋などの地本問屋も、和泉屋・須原屋などの書物問屋とは一線を画しつつも、連絡は絶えずあつたので、書物問屋などが入手した京坂情報から間接的に情報収集することもあつたはずであり、また『中外新聞』が発行される以前からも、敗走旧幕府兵を含む西からの来訪者などを、独自の情報ルートとして活用していた可能性も十分にある。

2 柳河春三による『中外新聞』の創刊

蘭・英・仏語に通じ、すでに多くの翻訳を手がけていた柳河春三⁽³³⁾、日本人の手による最初の新聞『中外新聞』を小川町の幕府開成所から会訳社の友人たちと発刊したのは、京都で政府内部機関誌『太政官日誌』第一号が発行された四日後、慶応四年二月二十四日のことであった。それは、かの慶喜自身による朝廷への謝罪・謹慎の奏聞状が町中に触れ知らされた二月十四日～十五日―市民を混乱状況に晒し、幕府による法支配が音を立てて崩壊していったあの日―から、十日後のことであった。勿論、すでに開成所教授職にあった春三自身は、東帰以後の早い段階で慶喜の朝廷に対する恭順姿勢を把握していた。だがその慶喜を朝敵とし、東征軍が進発したとなると、今までのように、ただ西洋事情を紹介するだけの定期雑誌、『西洋雑誌』を発刊しているだけではいられなくなり、内乱に関する情報を可能な限り正確に収集し、混乱した状況にある江戸市民の情報渴望を満たし、提供することに思い至る。その意を決するに、この十四日～十五日の町触下付は決定的な意味をもっていたに違いない。発刊第一号には、日本日付二月十四日の「横浜出版新聞紙」の抄訳とする記事が多くを占めているが、それは「神戸より来りし書状の趣」として、次のような文面で始まっている⁽³⁵⁾。

箱根の街道既に攻進の路となりたる由を慥に申越したり。然れども諸説一定せず。或は十四五日以前、薩摩人七百人急に京都を出立すと云ふ。是は箱根の備へ無きを知りて之を奪ふが為と見えたり。

どれくらい兵が、今どこまで来ているのか、何のためか、確かな情報を得ようとする姿勢は、「諸説一定せず」という表現のまま報じたことにも顕れ、単なる風聞ならば斥ける姿勢は、その後も一貫する。また、京都および長崎出の情報として、会津征討令についても筆が及ぶ。

会津竝に伊予の松山、備中の松山、高松、大田喜⁽³⁴⁾、此大名は皆京都

に敵対せし者にて、其屋敷をも領地をも召上げらる可き由なり。此事を朝廷より布告ありしかば、仙台の在東家老、全く朝敵に非る由の歎願をなし、其他諸方よりも色々の願書出たる由なれども、長き評議の後忽ち征討を仰出されたり。是に於て彼家老は大に驚き、全く其主人の命は左様の事には是無き旨を申述べ、尚又再願をなしたれども、再び別紙を以て会津の地を攻取るべき由を命ぜられたり。但し是は仙台と会津との間を離すが為の謀と見えたり。何れ今少し日を経たらば委しき事相分るべし。此度の朝廷の決定は全く薩摩と長州との決議より出たる事なるべし。此の如き未曾有の大変革は蓋し天子を尊ぶの真意より出たるにはあらずして、只權勢を備へたる名の影有るに依て之に及びしならん。故に北方諸大名の不服なるも亦其理無きにあらず（柳河註「北方とは関東の事」、傍点引用者）。

慶応四年二月という時点で、この驚くほど冷静な情勢分析を、「横浜出版新聞紙」抄訳という形で、まず第一号発刊に載せたのである。また続けて、「一橋は只恭順謹慎にして敢て戦を好まず」との文も載せている。他に、「外国人に向て砲発の差図をなした」神戸事件の「罪」で、「備前侯家来」が「今日誅せられた」という記事（正確）も載せているし、内戦勃発に対し、アメリカが局外中立の立場をとり、軍船武器の売買を禁止したことなども報じている。

こうして、江戸の市民・民衆が、一体何を信じて良いのか判らなくなり、混乱の極みに放り出された十日後に、渴望されていた情報が、柳河春三の手によって、木活字印刷でもたらされたのである。⁽³⁶⁾ 定価は通常一匁、間隔は長くても五日、毎日出る事もあった。売れ行き上々で、無断重刷すら出たようで、第七号には、取締として表紙に朱の印を押し、朱印無きものは扱わないよう書林に申し入れている。さらに、第一号から第七号までを再版、合本も出すと、第十二号に記している。

3 『中外新聞』の展開と町触のその後

二月二十八日発行『中外新聞』第二号には、第一号で報じた軍需品売り渡し厳禁を含む局外中立宣言を、アメリカにつづいて各国が調印したこと、「徳川が政権返上したので、条約も王朝との間で調印していただきたい」との京都政権兵庫奉行の申し入れに対し、「条約は各国帝王が幕府と結んだもので、新条約も本国帝王の指図がなければ調印できない、近年数々の外国人殺害事件が起きているが、殺害禁止の天子御調印の証書が出て初めて条約についての談判が可能となる」と外国人が答えた旨が報じられている。諸国の局外中立と攘夷事件の多発という、「新政府」最大の泣き所さえ、江戸市民の知るところとなったのである。

一方、二月十五日以降、町触はすっかり威厳が低下したが、それでも今度は朝廷への恭順姿勢を慶喜自身の悲痛な声として伝えることで、一月中の空気を一掃し、再度民心を掌握すべく、懸命な努力が続けられる。それは三月二日の町触に集中的に表れている。

そこでは、慶喜の謝罪謹慎精神が、「此度従京都御軍勢御差向相成」という切迫した状況のなかで強調され、「万一官軍江対し軽拳暴動致し候もの」があれば、「対シ天朝江恐入候而已ならず、夫か為ニ御誠意も、不相達」「万民塗炭ニ落入」ので、「忠義之志ニ出候共、相達候趣ニ差悖候而は御為ニ不相成候間」「決而妄動無之様堅ク相守可申」とあり、これを「町中家持借家店借裏々迄忤人別ニ」申し聞かせている。

つづく慶喜自身の訴えは一層直截である。「官軍江対し決而粗忽之拳動有之間敷」と命じた後、「仮令忠義之志ニ出候共、此旨ニ相悖候ものは我意ニ背候者」であり、「予カ身ニ刃ヲ蒙るも同様之義ニ付、此旨篤と相弁」えよ、とあるのだ。これについては、「町中家持借家店借召仕」に對し、「忤人別」に「篤と申聞」させるだけでなく、自身番屋に張り出し、「今日中」に「惣牀行届キ候様」とまで厳命している。³⁷⁾

旧幕府自らが町触を通じて作り上げてきた対薩摩全面対決態勢が生み出す行動は、本来ならば「忠義之志に出候」行動である。それを「軽拳暴動」だと否定するために、「忠義」に発した「妄動」は「天朝」に對してのみならず、「上様の御為に」ならないことだとし、慶喜自身が「予が身に刃を蒙るも同様」なのだ、と言ったのである。だからどうか堪えてくれ、との含意である。説得させる迫力の上では、「天朝」より「上様」に「予」が優っていることに、注目しておこう。

五日後の三月七日発行『中外新聞』第五号には、「徳川陪臣 姓名」(某)が京に宛てた書状が掲載された(文意大略)。³⁸⁾

近く官軍が問罪するという。正邪について今は論じない。百年後、広い視野から論ずる人の出るを待つ。官軍が兵庫外国人館を襲撃した(神戸事件)ため、米国は軍艦を配備し、英仏も同じ行動に出たと。遠くはインド近くは支那を見よ。長州官軍兵は正邪を叫びながら日本人同士の食い合いを進め、西洋諸国がこれに乗じる。皇国も同じ轍を踏みつつある。口に勤王を唱え、皇国が崩壊し万民が塗炭の苦しみ陥るのに気付かない。朝廷に我が微衷を愁訴したく思うが罪ある私は主君と共に死を待つのみ。だが、斬首が目前とあらば黙っている訳にはいかない。参与閣下が代訴されんことを切に望む。

この「徳川陪臣某」は勝海舟、代訴を願っている「参与閣下」は、勝が文久年間以降親交を深めていた越前藩家老格、新政府参与中根雪江であり、この文面を「別紙」として添えた本書状の宛は、雪江仕える松平春嶽である。³⁹⁾春嶽は文久年間以来、勝を高く評価し、屢々書翰の往来があったことは夙に知られていることである。『海舟全集』別巻1に収録されている書翰の日付には「辰正月」とだけしかないが、雪江編する『戊辰日記』には、勝が正月十八日付で記した春嶽宛書状に別添の形で掲載されている。従って、「近々官軍問罪之御拳あり」(原文)との起筆文言は、元々はその時点での情報によるもの。勝は、前日十七日に軍艦

奉行から海軍奉行並へと格上げされたばかりで高揚している時。しかも、正月十一日に起きた神戸事件に触れているところから、その情報を得た直後に、それを直接の動機として書いたものであると判断される。

だが、『中外新聞』では、なぜか日付が「辰二月」となっていて、「右京師ある人の書状中に之を得たり」といった入手ルーツが記されている。⁽⁴¹⁾春三は大事な記事の入手ルーツは屢々記しているので、これを額面通りに受けとれば、京在住の知人からの書状中に挟まれていたということになる。春三と春嶽もしくは雪江との、この時期の関係は不明であるが、この年九月には春嶽との直接の交流があることが判っている。⁽⁴²⁾あるいは「京師ある人」が春嶽か雪江自身である可能性もある。ただ、そうであれば『中外新聞』ではなぜ日付が「辰二月」なのか。文面はほとんど変わらないが、『中外新聞』記事は後から僅かに手を入れて整えた形になっている。これらを考慮に入れると、勝と春三の関係も判明していないが、勝が、いよいよ迫ってきた江戸城総攻撃を目前にし、山岡鉄舟を西郷の下に派遣する前に、世論作りを目的とし、春三の意見が近いとみて、かつての書翰控えの日付を二月とし、「京師ある人の書状」に紛らせ、『中外新聞』に送り込んだ、という可能性も考えられる。経緯はともあれ、こうした報道のためもあって、従来『中外新聞』は佐幕派系新聞と称されてきた。だが、この「徳川陪臣某」＝勝安房の主張は、「佐幕」の語に包含されるものではない。傍点部に注目しよう。主張のベースは神戸事件を契機とした民族的危機意識であり、旧幕府を支えるといった思想を遙かに越えている。西洋を観察し続け、現段階における各国の局外中立の意味も把握している春三は、この勝の危機意識ともさらに別見解のはずである。同じ号に、天皇が仏・蘭公使と会見したことが、パークス襲撃事件についての英国人書状訳文も掲載している。『中外新聞』は決して単なる佐幕派系新聞ではないのである。

4 藤岡屋情報と戊辰戦争諷刺錦絵

戊辰戦争諷刺錦絵の多くは、内乱に関する細かい情報を得たうえで描かれている。個々の諷刺錦絵の主題と作製時期とを解明するにあたり、前著では、時々の内乱情勢を『復古記』『戊辰日記』などの史料から探り確定したが、⁽⁴³⁾具体的な情報源には触れ得なかった。前著執筆時点では、『中外新聞』の記事などに気付かなかったためである。

そこで本稿では、『中外新聞』を含めた多様な情報源と戊辰戦争諷刺錦絵の主題との関わりについても触れていく。なお、本稿では戊辰戦争諷刺錦絵の画像と解説は一切省略する。前著の画像ナンバーを「」内に記すので、該当画像・解説を参照していただきたい。

まず本節では時期を遡り、藤岡屋由蔵が流した情報との関わりをみておく。藤岡屋は金沢中納言殿（加賀藩主前田慶寧）が正月七日付で藩臣一同へ申し渡した書付として次の文書を手し、流している。⁽⁴⁴⁾

今般朝廷大变革被仰出候義は、其実は全く薩州家奸臣共之所為より出候二而、暴威を以朝命を恣ニし、其証跡顕然たるを以、既二朝日徳川内府様、御上洛討薩之思召ニ而、於此方様も、皇国之御為速ニ御人数「被」差出、猶此上御出陣「も」被遊「候ハ」内府様へ御協力被遊候思召ニ候、此段何れも「可申聞旨御意」⁽⁴⁵⁾候。

（辰ノ正月七日）

この文書、『復古記』にはみられず、『復古記』編纂原史料の内、加賀藩上申の家記、『前田慶寧家記』にも存在せず、また『大日本維新史料稿本』中にもみられない。だが、日付はともかく、文書そのものは『加賀藩史料』幕末編下巻の内に、「御用書留」からの抜粋として収録されているものとはほぼ同文である。「御用書留」正月六日記事中の、「御殿より御近習頭迄、御親翰被成下、御達可申候条、追付出座可致旨、暮六半時過御近習頭浅野内兵衛より、御用番源五右衛門迄相達候に付、致出座

候処、左之通相公様御意書等相達候」に続く親翰達書である。⁽⁴⁶⁾

すでに幾つかの研究によって明らかにされている通り、この時期の加賀藩は、国許と京都詰とで、執る方針に大きな違いが生じている。⁽⁴⁷⁾

前年、病気を理由に上京を遅らせていた藩主前田慶寧は十二月九日、王政復古クーデタ当日、混乱の京に参着、僅か三日間在京しただけで十二日には「私儀多人数召連居候ニ付テハ自然心得違ノ者相生シ可申哉」などと、理由にならない理由を挙げ、京のことは京詰家老前田内蔵太孝錫以下に一任し、これまでの在京年寄二人も含め、藩兵を率いて京を引き上げてしまう。⁽⁴⁸⁾以後この時まで慶寧は国許にいる。

藤岡屋が入手した慶寧の親翰文面は、勃発情報を得る以前に書かれたもののように見えるが、加賀藩京詰岡崎屋敷から金沢への情報は、『加賀藩史料』で見る限り、ほとんどが丸三日弱で着いている。勃発情報も、同史料中の「見聞袋群斗記」によれば、勃発から三日目の六日、「朝四時前、京都より平野貞吉早追に而罷越、正月三日同所之変事之儀、金谷江罷出巨細言上致す」とあり、同日の「暮六半時過」より後の時刻に親翰が下達せられた時点では、すでに勃発情報を得ていたことになる。⁽⁴⁹⁾

ということは、勃発情報入手前に書いた親翰を、情報が入った後に、敢えてそのまま発したことになる。この背景には、勃発前、徳川慶喜が慶寧に対し、出兵登京を要請していた事実がある。書翰全文を掲げる。

一 翰呈晋。然者兼而天下之公論を以、皇国を維持致見込之処、御変革之機に乘じ、薩奸臣事を用ひ、此度之形勢に至り候に付、不得止別紙之通奏聞状指出し、奸人共掃除、大乱を未萌に防候様致度、尤輦轂之下に於而騷擾を生じ候而は、実以恐入候儀、殊に右は修理大夫之素志にも有之間敷候へば、速に奸人指出候へば干戈を用ひずして鎮定致し度候得共、自然無余儀交戦に及候とも、素より兵を好むに無之、天下と共に乱階を絶んと存候。必他念無之、先頃賢兄京師出立前夜、長大隅守を以被申候趣も有之候得共、前書不得止この

情深諒察被致、人数召連早々御登京御尽力有之候様、千万依頼する処に候、臨筆情緒如海書不尽候、不一。

正月 日 慶 喜

前 田 慶 寧 殿⁽⁵¹⁾

書翰中の別紙奏聞状とは討薩奏聞状のこと。あきらかにこの「人数召連早々御登京・・・」との依頼に応えた出兵の、趣意書である。

一方、国許の「佐幕」傾向を憂いていた京詰家老前田内蔵太は、正月朔日付で、兵を出すにしても藩の近江領今津あたりまでであれば後で申し開きも出来るであろうが、といった趣旨の書翰を弾番宛に出していた。⁽⁵²⁾この内蔵太の書翰と、討薩表の付された慶喜からの出兵依頼書翰とが金沢に着いた五日の時点で、藩年寄前田土佐守直信は内蔵太に対し、「皇国之御為徳川内府様江御協力」の立場から、「先、江州御領地迄御出張」として「一大隊」の兵を出す、と返書していたのである。⁽⁵³⁾「慶喜書翰による佐幕論激化」と言われるこの状況のもとで、先の慶寧親翰が書かれ、六日早朝に勃発情報が入り、「内府様江御協力」のため、慶寧自身による出兵趣意書が下達されたものと判断して間違いないであろう。

藤岡屋がどのようなルートで、この慶寧による出兵趣意書を入手したのか、またその日付が何故「七日」となっていたのか、などは一切不明であるが、この慶寧親翰は、絵師たちが加賀藩をかなり後まで旧幕府側に居たように描く事例⁽¹⁴⁾⁽¹⁵⁾⁽²³⁾⁽²⁵⁾⁽²⁷⁾⁽³⁴⁾⁽³⁵⁾の根拠となった情報の一つと考えられる。藤岡屋は、勃発情報入手以後（正月四日に大坂尾張屋七兵衛から出た情報が九日に到来、これを市中に流したのが最初と思える）、⁽⁵⁵⁾慶喜が提出する予定であった薩摩藩罪状とほぼ同じ文面と、藩邸没収および家来の退去を命じた情報を流し、またその一方で、京都三条大橋に出された慶喜弾劾建札の写し等も収集して流している。⁽⁵⁶⁾

藤岡屋は多様な角度からの情報を次々に収集しては流すなかで、十五日ころ、「古本翁著述」として「薩州落し咄し」を流した。以下要旨。⁽⁵⁷⁾

三月下旬から出始め、閏四月上旬にも「新政府」内にあった江戸親征案が江戸に流れていたのであり、その情報を取り入れたのであった。⁽⁶²⁾

また、「子供あそびぼんでんまつり」⁽²⁵⁾では、可愛らしく描かれた天皇が「わるか」と書いた錦旗を掲げ、「今にみんなのもつていたものふんだくるぞ」と語っていた。それについて、「徳川方は勿論、新政府方諸大名の知行地も召し上げる」という含意があり、「版籍奉還構想の一端を天皇・天皇家による全領地・領民掌握という方向に誤解しての」「悪か?」という自問である、と解説。背景として薩長二藩による封土一部奉還の動きを記しておいた。だが、この動きは情報としても流れていた。薩長の奉還については藤岡屋が三月の早い時期に掴んで流し、三月二十一日発行の『中外新聞』第八号では、「近頃薩長二藩より京都に領地を献ずるの議有り、薩州は十萬石を奉り長州は先年侵掠の地を献ず可しと云ふ」と報じ、「この二藩は多年の骨折りで王政を復したのだから加増を願っても良いのに、却って領地を献ずるのは諸侯の地を削るうとの下心だ。加賀藩はこれを聞いて十萬石を献ずると申し出たところ、薩摩が半高五十萬石を出すべきと言ったため加賀は大いに不平という。京都では諸大名の半高を献すべきというのが風聞だ」と評していた。⁽⁶⁴⁾

この風聞・論評は、むしろ版籍奉還構想に近く、天皇家による全土領有という理解に繋がるものではない。だが、これとは別に、非常に激しい天皇糾弾文が『藤岡屋日記』の正月末尾に記録されていた。それは「無道之天子」に始まるもので、「王政復古杯企て天下擾動大害の基を生ず、且天子たる者万民を撫育するを以て天是二天下を命ず、今二天理二背キ人心二違ふ、其罪勝る共難し、依之牧野ノ一戦、天必汝を誅し給ふものなり」と弾劾している。⁽⁶⁵⁾この視点から天皇を描いた戊辰戦争諷刺錦絵はないが、こうした天皇弾劾文さえ世に出るような江戸情勢が、天皇を可愛らしく描いておいて、もしかして天皇は「わるか」と問うような発想を生み出す、その背景となっていた、とみるべきであろう。

2 和平へ動く和宮・天璋院・輪王寺宮

戊辰戦争諷刺錦絵の数多くに、和宮（静寛院宮）と天璋院が描かれている⁽¹⁾⁽²⁾⁽³⁾⁽⁴⁾⁽⁵⁾⁽⁶⁾⁽⁸⁾⁽⁹⁾⁽¹⁰⁾⁽¹¹⁾⁽¹²⁾⁽¹³⁾⁽¹⁵⁾⁽¹⁶⁾⁽¹⁷⁾⁽¹⁹⁾⁽²⁰⁾⁽²³⁾⁽²⁴⁾⁽²⁵⁾⁽²⁸⁾⁽²⁹⁾⁽³²⁾⁽³³⁾⁽³⁶⁾⁽³⁷⁾⁽³⁹⁾。『には和宮が、』には天璋院が、無印には二人が描かれている。これらの多くが、二人とも旧幕府側で動じなかったことを描いていると共に、東征中止と徳川家相続のために動いたことなども掴んで描き入れたものが少なくない。こうした情報はどこから得たのであろうか。

情報以前に、眼前の動き自体を見て掴むということもあり得る。正月十二日の東帰から十八日ころまで、対薩摩戦争態勢の堅持とは別に、慶喜が和宮を通じて朝廷に謝罪の意を表明するために、天璋院から和宮に働きかけてもらうという動きがあったが、これは江戸城内の動きであり、市民たちは知り得ない。⁽⁶⁶⁾だが正月二十一日、和宮の使者上臈土御門藤子が大奥から出立すれば、それは市民の目に触れる。もともとこの動きを情報として流した記事はまだ見出していない。町触ではまだ薩摩対決態勢を固めていた時期、目撃しただけでは意図は掴めなかったであろう。

三月十日、いよいよ総攻撃かという情勢のもと、藤子は和宮が先鋒総督橋本実梁宛に認めた歎願書翰を持ち、二度目の出立をする。既に慶喜の謝罪恭順が徹底周知され、総攻撃の噂も飛び交っていたので、目撃しただけでも意味は理解できたであろうが、これについては、藤岡屋が「静寛院宮様御女臈年寄おふじ殿」が東海道出立したと、差添二人の氏名と和宮の命であるという記事と共に、流している。⁽⁶⁷⁾

道先鋒総督岩倉具定に宛てて認めた歎願書翰を年寄玉島に持たせ、十一日に立出させたことについても流している。⁽⁶⁸⁾天璋院については、十一日に「表使の福田」らを、差添や医師と共に川崎の西郷吉之助のもとに派遣、内談金六万両を二歩金で渡して帰ってきたという情報を流している。⁽⁶⁹⁾

和宮・天璋院ほどの数はないが、仲介役として描かれることが多いのが、上野寛永寺住持を兼ねていた日光輪王寺宮門跡能久親王である〔②⑦⑮⑲⑳㉔㉕㉖㉗㉘㉙〕〔㉚㉛㉜㉝〕〔㉞㉟〕は列藩同盟盟主とされた姿を描いたもの。

東帰した慶喜が朝廷に対して謝罪姿勢を示す上で、仁孝天皇の養子輪王寺宮に歎願出立を要請することは、和宮の書翰に勝るとも劣らない意味付けがあったに違いない。だが、慶喜の要請に応じ、正月十八日に宮が西丸に登城したことは、目立ったではあるが、対薩摩態勢固めが本格化している時期、一般市民には意味が掴めなかったはずである。

が、二月十二日、供揃いで上野に入ることが前日に町触で周知され、その上で慶喜が寛永寺に入る。翌十三日には和宮と天璋院がそれぞれ輪王寺宮に宛てて認めた書二通を届けに、大奥から使いが入り、その翌十四日に慶喜謝罪の文言が町触で徹底周知されると、市民の耳目は上野寛永寺一点に集まる。そして二十一日早朝、能久親王が歎願。黒門外で旗本・幕臣多数が見送ると共に、越後高田藩以下、館林藩・土浦藩・秋月藩等から家老一人ずつと多数の藩兵が続々と随従するなど、誰もが知る歎願発興となった。そしてさらに歎願以後の道中情報も流される。

藤岡屋は、武家の随従は認められずに帰府させられたが、宮は無事である旨を知らせた寛永寺御小人頭の三月二日付書翰を流し、さらに寛永寺大慈院代が同日付で認めた文も流したが、そこには、駿府に進んで有栖川宮大総督との会見に臨む上で、樂觀的な見通しが述べられていた。

そして総攻撃中止後の二十日、宮が無事に上野に帰院するのだが、翌二十一日付発行の『中外新聞』第八号には、「十五日から三道先鋒が次々に江戸に入り込んできているが、今この様に穏やかなのは、日光宮様のお取り扱いがあったためと、勝安房守の尽力で参謀西郷が周旋に動いたからだ」という記事が載ったのである。〔⑮〕「子供遊び夏の栄」、〔⑲〕「寺子供幼遊び」、〔⑳〕「子供あそびぼんでんまつり」に描かれた輪王寺宮像の背景には、特にこうした情報があったと言えよう。

3 開城までの『中外新聞』と市中困窮人お救い

輪王寺宮帰院二日前、三月十八日発行の『中外新聞』第七号には、小田原・佐倉・上田・佐野四藩重臣が、譜代藩・旗本など四十三「藩」主連名の慶喜謝罪歎願書を総名代として持参、三月二日に太政官に提出したこと、また外様でも仙台・二本松・米沢などの諸藩が徳川に寛大の処置をと歎願している、といった記事が掲載されていた。

翌十九日に官軍が甲州街道口から市谷の尾張藩上屋敷に入り、夜具千五百人分が市谷・四谷・麹町に割り付けられる。町人もこの事態に黙ってはいない。「官軍御用の夜具・炭・油・蠟燭などが町方負担とされ、地借・店借にまで出銀させざるを得ない、小前難渋の折、当面は七部積金を以て立て替えたいので、町会所に沙汰していただきたい」旨の歎願書が、二十七日に世話係名主共から町奉行所に対して出されている。

こうした状況のなか、二十八日に『中外新聞』は第九号を発行、世界と日本の新聞を論じる。「英国は最も盛んで禁制が無く、紙上で国政や役人を批判しても咎められず、却って廷議の参考とされる」と報じ、『中外新聞』は発売一ヶ月で千五百人が購読したと報道。さらに同じ号で「天子が二十二日に一万人の兵を率いて大坂へ行幸した（正しくは発京二十一日、着坂二十三日）」と報じている。〔⑧⑩〕最早大坂行幸についても、わずか七日後に、直接江戸市民が知るところとなったのである。

四月一日、『中外新聞』第十号は、上方情報として、会津重臣田中土佐らが「歎願書」を太政官弁事役所に提出したと報じた。以下要旨。

主君容保が京都守護職を命ぜられて以来、苦難の奉職に就きました、が、図らずも先帝から寵愛を蒙り、御賞誉の宸翰を下されるなど、主従ともども感涙に絶えませんでした。主君容保の誠実は今も当時と変わるものでなく、伏見戦争は、徳川内府上洛の先供として登京中に発砲され、やむを得ず応戦に及んだままで、闕下を犯すつもり

など毛頭ありません。朝敵の汚名を被った今、死を賭してでも主君の雪冤を果たすと、藩内一致しております。片時も早く雲霧快晴し、一藩の人民が安堵できますよう、幾重にも懇願致します。

歎願書として報じてはいるが、無実を訴え、対決の意思表示しているようなもの。これが、いよいよ官軍が少しづつ江戸に入ってきているという時、江戸に流された会津の姿勢なのである。

さてあと九日後、四月十一日には先鋒隊が入城するという、緊迫した空気の漂う二日、江戸町奉行所は市中貧困者に対する大規模な御救米支給を決め、対象となる貧困者名簿を大至急提出するよう、町名主たちへ通達した。⁽⁸²⁾ この通達文は安政五年八月と慶応元年六月に出されたものとはほぼ同文で、最大規模の支給として位置づけたものである。が、過去二回の事例と明らかな違いが、重大なことを物語っている。貧困者を調査し名簿を作成提出させるまでの期間と提出方法である。安政五年の場合、八月十七日に命じ、「急速御取調」とあり、二十三日から翌月五日まで最長十三日間である。⁽⁸³⁾ 慶応元年の場合、六月二十日に命じ、「此度は格別御急」とあつて晦日まで九日間である。⁽⁸⁴⁾ それに対し、今回は四月二日に命じ「急速御取調」とあるだけでなく、「来ル十日迄之内、壹ヶ町二而も御出来御手操次第、追々御差出し可被成」とあるのだ。最長八日間、十日までに、一町単位でよいから出来次第順次出せ、というのである。これは何を意味するか？ 御救米は名簿が出され次第支給される。東征軍兵士の飯米は「新政府」に恭順を表明した各藩から供出させ、用意してはいる。だが、駐留が長引けば江戸保管米からの供出要請が必至となる。後八日、先鋒隊が入城する前日までに、江戸保管米を御救米として困窮町民に振る舞おうというのである。町奉行所役人は、一月末までは対薩摩戦争を想定し、町兵取り立て案を練っていた者たちである。彼らの心は、東征軍兵士よりは、確実に江戸町民の側にあった。

4 開城Ⅱ先鋒隊入城時の江戸

町奉行所の心意気を知り、町名主たちが大急ぎで困窮人名簿を作成し始めたところから、十一日開城を挟んで十四日まで、緊迫の江戸市中の様子を、市民眼前の動向と情報の二側面から探っていこう。

四日朝、勅使先鋒総督橋本実梁と副総督柳原前光以下が池上本門寺を出、品川、天徳寺を通り正午ころ江戸城に入る。⁽⁸⁵⁾ 勅諭五カ条を田安慶頼らに伝えた後、本門寺に戻る。⁽⁸⁶⁾ 同じ日、北陸道鎮撫総督高倉永祐と副総督四条隆平以下が千住を経て江戸に入り、浅草東本願寺を陣営とする。⁽⁸⁷⁾

五日に発行した『中外新聞』第十一号は、京都『太政官日誌』八号までの分が送られてきたとし、「江戸では入手し難いので京都書林にかけあい、この新聞と交換し互いに弘めたい」という記事を載せた。『太政官日誌』を通じ、「新政府」情報の収集を意図したのである。同じ号で、第七号記載の四十三「藩」歎願書について、「大総督を経て訴えよと言われ駿府に戻り、大総督に渡した」と報道。「勅使九条殿と沢殿が薩摩兵を率い軍船にて松島へ到着」といった官軍動向も報じている。⁽⁸⁸⁾

先鋒隊入城がいよいよ迫ってきた九日、昼前には和宮が清水館へ、続いて実成院も清水館へ移り、翌十日には天璋院・本寿院が一橋館へ移る。⁽⁸⁹⁾ 同じ十日、「百姓町人共二おゐては元来天子之御民二而、万民塗炭之苦を被為救候は朝廷素より御趣意二候間」という、東山道総督府参謀名による「新政府」側の触が、町年寄役所を通じ、初めて江戸市中に出されたのであるが、その町年寄役所が、提出された市中困窮人名簿に従って府下貧民に御救米を支給していたのも、この日までのことだった。少なくともこの瞬間、誰が「万民塗炭之苦」を救ったのか、「百姓町人共」には判っていたし、「天子之御民」は虚ろにしか響かなかった。

橋爪貫一ら海軍会社が「内外新報」を発刊したのも入城前日のこの日、十日であった。第一号記事には「新政府」泣き所の一つ、外国公使に対

して約束した攘夷行為への厳罰文⁹⁴「五榜の掲示」第四札が、両勅使らの「館内」に張り出されたものの写として掲載され、「新政府」がいまだ高札としては出していない江戸で、周知する役を担ったのである。⁹¹

同じ入城前日の夕刻から翌朝にかけ、歩兵約二千人が大脱走⁹²。そして十一日午前十時、慶喜が上野寛永寺を發駕、水戸徳川家へ向かう。彰義隊が千住まで見送り、脱走隊が松戸で随従を願うが説諭され、諦めている。⁹³ 入れ替わって昼、東海道先鋒隊が入城する。参謀海江田武次・木梨精一郎以下、薩摩・長州・尾張・肥後・備前・佐土原・大村の七藩より二〜三人ずつ入城。⁹⁴ 同日夜、歩兵屯所の五百人がさらに脱走した。⁹⁵

また同日、本庄藩浅草空き屋敷を本陣としている北陸道総督総務方から、北陸道総督御本陣と諸藩軍入用として、夜具・油・行灯・燭台・土瓶・茶碗・手桶・盥・柄杓・火鉢・湯風呂・据風呂などを江戸市中負担で差し出すこと、一兵士一日の食糧として白米七合と金一朱銭百文を渡すのでそれで賄うこと、朝は香の物、昼・夕は菜一種をタツブリつけること、などが命じられ、名主たちは請け書を提出させられた。⁹⁶

翌十二日朝、激譁を理由に「新政府」海軍先鋒への受け渡し日延を願っていた榎本武揚が、旧幕府軍艦七艘・乗組員二千人を率い脱港⁹⁷。その十二日、田安門近くに屯集していた肥後藩監視下の旧幕府歩兵約六百人（一説千人余）が騒擾。肥後藩だけでは抑止できず、先鋒総督は備前以下六藩兵に監視させ、虎門をはじめ城周囲十七箇所を固めた。⁹⁸ だが翌十三日には軍艦脱港に呼応し、歩兵は再び騒ぎ肥後藩兵に抵抗。小銃を向け「売国の賊」と罵る。肥後藩は武力征伐を総督へ訴願するに至る。⁹⁹

旧幕府兵らによる抵抗の一方、町人たちも嵩みだした官軍負担について対策を練り出す。十三日、官軍宿陣費用の負担について、町名主たちは、①積金三ヶ月分を組合単位で集める、②一ヶ月の積金を金千八百両余とする、などを決め、伺い書として町年寄に提出した。¹⁰⁰ 一方、同日付『中外新聞』第十三号は、入手した「仙台侯建白書」を報道。¹⁰¹

今人心疑惑五つあり。一、伏見発砲は会桑が先か薩摩が先か。二、徳川が政権を朝廷に返した今、朝廷に背くことなどあるだろうか。

三、一旦兵を動かせば無辜の人民が塗炭の苦しみに陥る、その様なことは幼帝の聖慮から出たことではあるまい。四、かつて長州藩が朝廷に兵を向け、朝敵の汚名を被ったが今は晴れている、今発砲の前後を以て朝敵としたのでは諸藩が心服しないのは勿論、下々に至るまで感服しない。五、外夷交際の今、兵を動かし四海鼎沸¹⁰²の状態になれば外国は黙っていない、そうなれば痛哭の至りだ。万民の服・不服を問わずに、急いで御追討になればいいには海内分裂・群雄割拠、外夷がその隙を窺って皇国古今未曾有の事変を生じる。

右の紹介は骨格部分のみである。前文も含めた長文全部を報じた上で、「この建白、全編詳密で文章明瞭、隔靴搔痒の感もなく、仮令この言当たらざと雖も黄絹色糸¹⁰³の称を失うことはない」と絶賛している。開城二日後の四月十三日、江戸に流れた二月十一日付伊達慶邦歎願書である。

そして十四日未明、いよいよ騒擾模様の激しくなった歩兵隊鎮圧のため、総督府軍は田安見附から田安邸内に練り込み、官軍諸藩応援兵と合流、大砲を田安見附外へ据え、牛込通りだけを明け、九段坂・飯田町口など諸方を固め、発砲態勢を整えた。¹⁰⁴ 緊迫の朝、午前八時ころ、田安見附直近の清水邸に退いていた和宮のもとに田安慶頼が面会に訪れ、歩兵が騒擾を起こしているので掃撃もありうると知らせた。¹⁰⁵ その後歩兵屯所に慶頼が出向き、「静寛院宮様が御あつかい（仲介）する」と伝えたことで「歩兵等モ大ニ恐縮シテ悉ク兵器ヲ出シ、真ニ恭順ノ色ヲ表ス」となったという。¹⁰⁶ 田安慶頼から和宮のもとに留守居役を通じ、歩兵は鎮撫できた、との知らせが届いたのは午後二時ころのことであった。¹⁰⁷

四月十一日の開城からこの十四日までの江戸は、「無血開城」の語感もたらす穏やかな状況とは、およそ遠かったのである。

③大総督宮入城と江戸〔四月二十一日まで〕

1 先鋒総督軍駐留下の市民派新聞

十一日の先鋒総督軍入城に続き、十四日に入城する予定であった東征大総督有栖川宮熾仁親王は「江戸表不穩」により池上本門寺に一旦着陣、十五日に芝増上寺に入り、再び江戸・関東情勢の様子を探る。⁽¹⁰⁶⁾ 実際、十四日に掃撃寸前で辛うじて沈静できた歩兵の騷擾に引き続き、東征軍各隊は上総・下総方面に逃れた二千―三千もの旧幕府「脱走兵」が引き起こす反乱の沈静に主力を注がなければならなくなる。⁽¹⁰⁷⁾ そのため、官軍兵力から町方支配のための要員を割くことはまったく出来ず、町方に対する支配・統制は田安慶頼の指揮下において旧幕時代の南北町奉行所の機構・役人によらざるを得ず、その町奉行所が旧幕府兵力を投入して市中取締を行うことさえ、東征進駐軍は黙視せざるを得ない有様であった。⁽¹⁰⁸⁾

だから、この時点で、府内での新聞出版動向などに目配りする余裕はまったく無かった。その間、『中外新聞』や『内外新報』は、脱走兵と東征軍との戦争を含め、あらゆる情報を収集して報道したばかりか、「新政府」の主張とは明確に異なった論調を次々と展開していった。

十五日発行の「内外新報」第三号には、忍藩家来よりの来状写として、東山道総督から、鴻巣・羽生両宿は当分の間主人松平忠誠へ「預け」と仰付られたため、羽生陣屋へ入ったところ、官軍兵「長州隊」が「三月十日に」来て、如何なる理由で入ったのか「賊兵や一揆への加勢か」と疑われ、当家の丹羽蒨が切腹してやっと申し開きがたつたが、なお大砲を城に向けられた。また、勝手向大難儀の折、官軍御用として白米一万俵を板橋宿に送るよう命じられた。家中へは渡らなくても天子様御用に差し支えてはならないので差し出した。

だが今般の官軍御通行でもう宿々在々とも疲弊している。同じ道を帰られたらとても堪らない。この上戦争が始まったら、家中在方とも潰れてしまう。どうか穏やかに済んでもらいたいものだ。

などの記事を載せている(要旨)。⁽¹⁰⁹⁾ 既に恭順を決していた忍藩家臣の口からも官軍への不満が語られ、それをそのまま報道している。同じ来状記事として、結城藩で、恭順派家臣に占領されていた自城を、三月二十五日に藩主水野勝知が彰義隊百人と二本松藩家来を率いて砲撃、落城させ、焼け残り屋敷に入城した、という衝撃的事件も報じている。⁽¹¹⁰⁾

同じ十五日ころ、十日の発行予定が遅れて十三号の後に出了『中外新聞』第十二号には、入手した『太政官日誌』の第五号記事が転載されている。その一つに、三月十四日、予定していた江戸征討の前日、「五ヶ条の誓文」儀式執行に際して示された「御宸翰」がある。これについては別稿で詳論したので結論だけを記すが、この「宸翰」は、江戸征討という大軍事行動を、海路の通じた大坂に出御して支援するという、天皇の衝撃的な親征行幸について、政府内反対派や新政府諸藩軍兵に対し、天皇といえは「九重中に安居」^(こゝへのうちあんきょ)しているだけと思うような因襲的觀念の破棄を求めたものであった。⁽¹¹¹⁾ 江戸征討は中止となった情勢下で、敢えて「宸翰」を報じているのだが、それは、先に第九号で報じたこの大坂親征行幸が、現に決行中であることからでもあった。

また、「内外新報」が報じた結城の事件を『中外新聞』も報道。さらに「上方情報」として、京都で世禄廃止の論があり公家の世禄廃止が近日布告される、といった評判も報じられた。前章1で触れた戊辰戦争諷刺錦絵「子供あそびぼんでんまつり」⁽²⁵⁾の天皇観には、『中外新聞』第八号記事に加え、こうした記事も影響を与えたものと思われる。

さらに、これら以上に『中外新聞』第十二号で目を惹く記事が、開成所神田孝平の署名入り論説である。「日本国当今急務五カ条の事」と題し、次の五カ条を掲げている。

一、我が日本は永久独立国たるべし、決して他国の附属となるべからず。二、我が日本独立せんと欲せば、是に相応せる国力を起さざるべからず。三、右国力を起さんと欲せば日本国中宜しく一致すべし。四、日本国中の一致せん事を欲せば、国人をして悉く政に従はしむべし。五、国人をして政府の政に従はしめんと欲せば、政府にて広く日本国中の説を採るべし。決して一方の説に泥むべからず。

とし、「右五ヶ条西洋国法学の大綱領に基づきて我国当今の急務を揭示するものなり」と結ぶ。発行は十日の予定であったから、先鋒総督入城の機に合わせ、「一方の説に泥むべからず」と、直言したのである。

同じ『中外新聞』第十二号は「駒込以下町人惣代九十余名」が、四月五日に先鋒隊宿所へ提出した歎願書全文も掲載している（要旨）。

これまで泰平の御恩沢に浴してきたのは、天朝と徳川家の御徳沢によります。今、上様が東叡山に謹慎され、罪を一身にお引き請けになり、諸人の苦を救われようとされていることは、大変有り難く恐れ入ることで、涕泣の至りで御座います。「然る処」段々と御先鋒が御繰り入りになり、市中一同昼夜寝食を忘れ、恐縮しております。どうか寛大の御慈悲をもって、下々の者共まで安心できますよう、御憐愍の御沙汰を下さいますよう、一同お願い申し上げます。

天朝に並べて徳川家の御徳沢を敢えて記し、慶喜が諸人の苦を救おうとしているのは涕泣の至りだ、とまで書いたのは、町奉行所の計らいにより、今彼ら自身が御救米を支給すべき困窮者名簿を作成している最中（三日目）だからなのだ（実際、四ッ谷塩町では九日に町会所に御救い人別帳を差し出した¹²）。その状況下、「然る処」として御先鋒御繰入が新たな負担増となつていると言外に匂わせ、憐憫の沙汰を、と入り込みつつある進駐軍に直接迫つたのだ。実にしたたかな江戸市民である。

こうした市民の歎願書も載せ、国家急務の直言もする。柳河・神田ら開成所グループの面目躍如たるものがあり、市民派新聞の誕生である¹³。

2 大総督宮入城直前

『中外新聞』の市民派新聞としての性格は、この時期『内外新報』にもみられる。『内外新報』は、十六日第四号から十九日第七号まで、毎日発行されたが、第四号では、七日に結城城が官軍に攻撃され、今は官軍が入り込んでいると報じ、第五号では、先に『中外新聞』が報じた伊達慶邦の歎願書全文を、家臣への布告文と共に転載。第六号では「当時、会津の勢いは次第に強大、北方大名悉く連合の様子だが、徳川家がこれを手助けすることはない」といった記事の含んだ、十日発行の「横浜新聞」を、橋爪貫一の訳で載せている。会津と東北諸藩のおおよその動向についても、外国新聞の訳という形で、すでに大総督宮入城前の江戸市民に伝えられていたのである¹⁴。そして十九日発行の第七号には、十二日発行「横浜新聞」記事の訳として、次の記事が掲載された（要旨）。

此度、御門^{みかど}に対し□□（慶喜）公が恭順姿勢を立派に示し、堅固な江戸城を明け渡したことは、我ら実に感愛するところだ。京都からも格別の寛典があり、国家泰平の時となれば外国貿易も元のように速やかに繁昌するようになるだろう。ただし、ここに違った動きがある。会津の一件だ。会津は仙台その他有力の諸侯と連合し、君家のために冤罪を雪ぐべく、すでに兵備を強化している。（中略）江戸からおおよそ三十里程の所で、北方の大名が南方の軍勢と接近している。合戦が間もなく始まるだろうと言われている。

この元記事「横浜新聞」発行の十二日とほぼ同日ころ、京都太政官代は、『太政官日誌』第九号を発行していた。そこには、大総督宮の江戸入城に際し、仙台藩に対して米穀五万俵を江戸へ廻米するように命じた大総督府の達書——二十八日には仙台藩に拒否されるもの——が報じられていた¹⁵。局外中立の立場から交易再開の願をもって日本情勢を見ていた居留地イギリス人らは、この時点で、京都太政官代よりも大局的見地から

みた正確な分析をしている。その正確な分析情報を、翻訳刊行により、江戸市民は大総督入城前に得ていたものであり、京都「新政府」が仙台に会津征討を命じようと、仙台は会津と連合しつつあるのだ、といった認識が江戸には生まれていたのである。この認識から、「当世三筋のたのしみ」「稽古所の賑ひ」(③・④)など、仙台が会津を影ながら応援しているといった戊辰戦争諷刺錦絵が制作されたのである。⁽¹⁷⁾

この『内外新報』第七号と同じ十九日、『中外新聞』第十四号は、四日に入城した先鋒総督に対し、陸軍副総裁白戸石介が大久保一翁・勝安房(海舟)を介して九日に提出した海陸軍一同による歎願二カ条を掲載した。⁽¹⁸⁾これは、四日に先鋒総督が田安慶頼に対して示した勅諭五カ条に反するもので、第一条は、城を尾張家ではなく田安家に預けて欲しいというもの、第二条は、軍艦・鉄砲は徳川の家名が立ち、高・領地が決まり次第差し上げる(が、それまでは留保させて欲しい)というもの。この二カ条は、いずれも三月十四日の勝・西郷会談で勝が提示し、四日の勅諭五カ条には反映されなかった箇条の蒸し返しである。⁽¹⁹⁾もちろん即刻却下されたのであるが、これをあえて報道したのである。しかも、「新政府」がこれを、十一日開城にともなう一連の江戸「大変事」の一つとして『太政官日誌』で報じたのは、これより後、四月下旬の第十一号であった。江戸市民は、「新政府」配下の諸藩軍兵士らが把握するより前に、旧幕府抵抗派の動き・要求を把握できたのである。

翌二十日、町年寄らは、橋本・柳原両勅使の宿陣三田有馬藩邸まで呼び出され、⁽²⁰⁾「官軍が一度に大勢着いたので行き届かないことも起きるであろうが、朝廷の御趣意は人民が心やすく暮らせるようにというものであるから、呉々も疑惑の心を抱かないように」といった「演舌」を参謀方から聞かされた。⁽²¹⁾四月五日に「町人惣代九十余名」が歎願した動きの背景に、官軍に対する「疑惑の心」ありとみて釘を刺したのである。

3 大総督宮入城と江戸市民

こうして、官軍に対する「疑惑の心」が市中に溢れるなか、二十一日、東征大総督有栖川宮熾仁親王が、午前十時に増上寺から乗馬出陣。錦旗を翻し、江戸城に入る。以後、江戸城に東征大総督府が置かれる。⁽²²⁾

この状況を、ある江戸市民は「当世百人一首」と題する、百人一首パロディーで次のように詠った。

風になびく錦の旗の紅ひは流れもあへぬ紅葉なりけり 有栖川宮⁽²³⁾
春道列樹の秀歌「山川に風のかけたるしがらみはながれもあへぬ紅葉なりけり」のパロディーである。山川に風がかけた 柵^{しがらみ}は、流れをせき止める紅葉だった、という本歌の「しがらみ」を「錦の旗の紅ひ」に置き替え、詠み手を有栖川宮としたこのパロディーには、大総督宮の入城を江戸庶民の目線で捉えた「茶化し」が巧みに詠み込まれている。熾仁宮親王が錦旗を翻して入城した江戸城には、親王のかつての婚約者、亡き家茂の夫人である和宮、静寛院宮がいる(実際には九日に清水館に非難している)。昔日、恋路の流れをせき止めたのは今は亡き孝明天皇、

ああ、自分が翻していたこの錦旗の紅ひ、これこそが柵だったのだ、と親王が気づいた、というオチなのである。⁽²⁴⁾
官軍の眼が届かない所では、こんな「手まり唄」も唄われていた。
一つとや ひら／＼ひらつく錦切れを肩に着て 東じゃ左様に思はない 光らない、(中略) …… 七つとや なんにも知らない⁽²⁵⁾
有栖川の宮 はる／＼東へ草臥に 戻りやんせ⁽²⁶⁾

東征軍歌「宮さま宮さま御馬の前のひら／＼するのはなんじやいな」「ありや朝敵征伐せよとの錦の御旗じゃしらなか」の対局に、茶化しや拒否の感情が、或いは秘かに或いは公然と、表されていたのである。有栖川宮入城当日の『中外新聞』第十五号は、二月付け「或る一諸侯歎願書」全文を掲載した。⁽²⁷⁾

《辰年》（正月九日十日私名代家来の者被召出、御書付を以て）徳川
《慶喜》
□□朝敵の罪へに依りて御追討被仰付候間、各藩陪臣吏卒に至る
まで方向を定め候様へ并に大号令御趣意相心得、国力相応の人数差
出し候様へ可仕旨被仰渡、誠に以て驚愕畏縮の至りに奉存候。就て
は速に奉勅従事可仕候。中朝より郡県の御制度被為在候へ共、皇国
自然の御體裁は封建制に有之、鎌倉覇府の時將軍家臣の名目相立、
陪臣陪々臣の分随て相定り、時移り物換り慶長元和以来今日までの
形勢を成し居候儀にて、凡普天下之卒土之濱尊卑貴賤不為王臣者は
一人も無之候へ共、封国領邑其地内の士民各其主其君に忠勤候
はば、則朝廷へ服事の道に可有御座と存奉候。私儀□□家臣に候へ
ば一意に徳川家を翼奉し朝廷へ忠勤仕度素志に有之、元来一途同路
にて更に方を異にし向を二にす可き所無之、追々□□恭順の効相立
《候はば》寛典の御処置只管歎願哀訴仕度心底に御座候。又人数差
出候儀は外御用筋に候はば何程にも出精勤可申候へ共、徳川征討に
付ての御沙汰にては乍恐臣子を以て君父を撃の誤に有之、人の大倫
天地の大経是に於て乎相悖り、昔時源義朝勅命不得止とは申なが
ら父為義を撃候も同様（の筋）義朝の逆名千歳難遁、勅命におか
せられ候ても亦三綱相缺、法度の御失體は終古難被為免、実に私一
身の進退難決のみに御座候。朝廷の御為に深く御惜み申上、何分
（奉）勅従（事）難仕候。陪隸微臣の身を以て直諫仕候儀余り恐入敢て
言上仕兼候へ共、臣子の身進退難決仕候段幾重にも性情の忍び兼候
處に御座候。何卒御憫察御宥恕の儀奉願（上候）。右願の趣意御採用
被下置候へば、独私一家の幸福にも無之、世道人心を千歳の下に維

持仕、今日朝廷の御闕失をも（聊）奉補候儀にて、冥加至極難有仕
合奉存候。乍去頑愚固陋遂に逆鱗を奉犯候次第、其罪万死難遁、闕
下に拝伏し斧鉞の誅謹で可奉待（旨申付）以重臣此段（哀痛）奉懇願
候。誠恐誠惶頓首謹言。

《》は『大日本維新史料稿本』表記A、「」は『内外新報』表記B、
〈〉はAに、（ ）はBに無し。三出典中、表記上の微細な差は無視。
歎願文は郡県・封建の国制論を封建論の視点から展開、鎌倉以来主君
に忠勤すれば則ち朝廷に服したことになるとし、一意に徳川家を翼奉し
朝廷へ忠勤したいと断言する。寛典の処置など遙か遠い二月、これは極
めて緊張度の高い論である。出兵命令については、兵を出せば臣子の身
で君父を撃つことになり、人の大倫天地の大綱に悖ると主張する。

源義朝が後白河天皇による為義追討の宣旨を受け、父為義を捕らえ、
勅命により首を取った事跡を、勅命に応じたために逆臣の名を蒙った事
例として挙げ、勅命に従えば「三綱相缺」する（『中外新聞』表記）と
主張。更に、出兵猶予の願を聞き届けていただけたなら「世道人心を千
歳の下に維持」でき、「今日朝廷の御闕失」を補える、とまで断じたの
である。直後の「冥加至極難有仕合」は不敵でさえある。勤王を基に、
徳川家臣としての倫理一筋を、少しも怯まず毫も媚びず、正面切って主
張している。だから、この「頑愚固陋」が逆鱗を犯せば万死遁れ難く、
「闕下に拝伏し斧鉞の誅」を待つ、と言ったのは見栄でもなければはっ
たりでもなかった。切腹の命をも甘んじて受ける覚悟の歎願である。

誰の歎願文か？『復古記』には無いが、『大日本維新史料稿本』に小
諸藩主牧野康民（後名、当時康済）の書として所収。またこの五日後、
『内外新報』第九号に小諸侯建白として掲載された。二月下旬以降、信
州に東山道先鋒総督軍が入り込む。その直後に認めたものであろう。
この歎願書、実際に先鋒総督に提出されたかどうかは判然としない。

だが、この後三月三日、康済は和田駅の督府陣屋に向き、勤王を誓い、京に上り、二五日には碓氷峠の守りを命じられ、出兵している⁽¹³⁰⁾。

あれほどの歎願を認めた康済に、如何なる呵責があつての屈服か、春三は果たしてどこまで掴んでいたのか、一切は不明であるが、この康済屈服前の歎願文が、大総督入城日の江戸で、衆目を集めぬ訳はない。

結 戊辰戦争第一期、江戸市民・民衆の意識をめぐる抗争の特質

正月十二日慶喜東帰から四月二十一日大総督宮入城までの三ヶ月強、江戸で生起していた事象をほぼ時系列に従って叙述してきたが、最後に、この事象に関わった人々を幾つかに群別して整理し直し、江戸民衆の意識・思想をめぐる抗争の構造的な特質を把握しておこう。

A群〔旧幕府諸勢力〕、B群〔東征軍勢力〕、C群〔江戸町民〕、D群〔情報発信者〕と類別する。

まずA群の動きであるが、この方向性は多様であつた。慶喜自身、正月下旬までは天皇に対する謝罪・謹慎の意思表示と、薩摩との対決は切り離して追求していた。それは、和宮と輪王寺宮を頼って謝罪・謹慎の意志を奏上すること、町兵取り立てを並行してすすめていたことに端的に表れていた。和宮・輪王寺宮及び天璋院の動向は明瞭で、慶喜謝罪・謹慎を伝達して徳川家の相続を計ること、和平一筋であつた。

この対極にあつたのが開城時に、東征軍への屈服を拒否し、江戸城から「脱走」した二三千の兵である。もちろん、すでに「薩賊」を「官軍」と認めた主君慶喜への忠誠という倫理的立場からは、「官軍」に決できないのであるが、それでも屈服を拒否して脱走したのは、薩長はあくまでも幼主を騙しているものであり君側の奸である、という感情が基にあるからで、それを以て脱走と戦闘の行為を自己納得化し得た。また、恭順することを前提に歩兵屯所に残った歩兵たちも騷擾を起こし、十四

日までは一触即発状態が続いていた。

また、会津藩・仙台藩らの行動論理の第一には、そもそも鳥羽・伏見戦争は薩摩が兵端を開いたのだ、という事実認識が根底にある。会津藩田中土佐らの歎願書には明瞭に「発砲され応戦」とあり、仙台藩主の「発砲はどちらが先かについては両論ある」という言は、会津藩が先とは断定できないとの主張である。薩摩が兵端を開いて幕兵と会桑に応戦させ、戦争状態に入った四日になって「錦旗」を担ぎ出し、「錦旗」に敵対する者は「朝敵」だとする、薩摩の卑劣な罠に嵌った、との悔やみ切れない思いが会津にはあり、それが仙台に伝わっているのである。だから、やがて脱走兵らと行動上同一となるのも当然であつた。

また、小田原・佐倉など四十三「藩」歎願書は、たとえ最終的に提出されず、またその後には官軍へ屈服する藩が続出したにせよ、歎願の論理は、慶喜謹慎を評価し、ひたすら徳川家への寛恕の沙汰を乞うもので、むしろ戦争回避を願った慶喜の意に沿うものであつた。

更に際だったのは小諸藩牧野康済の歎願であつた。「徳川家臣」を強調した論は四十三「藩」歎願書に繋がるようではあるが、そんな穏やかなものではとてもない。たしかに、発砲の前後を論ずることもなければ、錦旗の正当性を問題視しての薩長私権論もない。ただあるのは、臣子として徳川家に仕えることで朝廷に仕えるのだ、という論一本である。この論理一つで、朝命だからといって慶喜追討の兵は出せない、と突っ張る。慶喜朝敵論の前に、これは一見無力のようである。だが、源義朝が勅命に従って君父の首を討ったために、後々まで逆名を蒙ったと訴え、敢えて「朝廷の闕失を補う」とまで直言する。こうした堂々の封建倫理・論理が、大総督宮入城当日に、江戸市民の眼前に示されたのである。次にB群の動き。三月十九日に東山道軍が甲州街道口から入ったのを皮切りに官軍が府内各地に入り込む。四月四日に勅使両総督が勅諭五箇条を伝えるために江戸城に入り宿陣に戻る。十日には「百姓町人共は元

来天子之御民」だと宣伝し、十一日に先鋒総督七藩軍が入城、城内点検を終える。そして二十一日に大総督官が入り、城内に総督府が置かれる。以上の江戸進駐総過程を通じ、市民の負担は急激に膨張。ここに、旧幕府町奉行による十日までの「御救米支給」が働き、「万民塗炭之苦」を朝廷が救うとの宣伝は破綻、「天子之御民」は空語と化す。

次にC群。正月下旬までは全町火消が町兵として「砲術業前」稽古をするという、薩摩との全面対決態勢が作られていった。番人千七百十五人を町兵に繰り入れるといった案も町役人側の了承を得て練られていった。だが三月二日には、薩摩と戦うことは「忠義之志」のつもりでも「妄動」となるとされ、それは天朝に対し恐れ入ることである以上に、慶喜の「身に刃」^{やいば}を向けることになるから堪えてくれと説得される。

半月後の三月十九日にはもう官軍が府内に入り、町方負担が増大し、町名主たちは早くも二十七日に、地借・店借層にまで負担が及ぶ状況だけは何とかして欲しいといった歎願を町奉行所に出す。入用が更に嵩んできた四月五日、町人惣代九十余名は進駐軍として入ってくる先鋒隊の宿所に「御憐憫のお沙汰」を願う歎願書を提出。それは、町奉行所の計らいで御救米支給対象となる困窮者名簿を彼ら自身が作成している最中のことであり、そこには「慶喜が諸人の苦を救おうとしていることは涕泣の至り」とまで記されてあった。にもかかわらず、入城の四月十一日、東征軍から大量の駐留軍用生活品の供出が命じられたのである。

さてこれらのなか、D群の活動は如何なる意味を持っていたのか。

藤岡屋は、三月末までで江戸での総ての活動を終熄したようであるが、その流す情報は多岐にわたり、中・下級幕臣や在府諸藩士を初めとして江戸市民の一部に売り渡されていた。正月には加賀藩主前田慶寧が慶喜の書翰に応じ、「今般の朝廷大変革は薩州奸臣どもの所為」として藩士へ出兵の趣意を申し渡した書付、「六日に津藩が幕府方を裏切った」という情報、木戸番人町兵取り立てに勢いを得た「薩州落し咄し」、さら

に、天皇が「王政復古杯企て天下擾動大害の基を生」じているとし、「天必汝を誅し給ふ」とまで弾劾した文などを次々と流していた。二月には、衆庶の期待を集めて発興した輪王寺宮のその後の情報を流したし、三月には「静寛院宮様御女臈年寄おふじ殿」が東海道出立したことや年寄玉島が出立したことも流すなど、和平に動く輪王寺宮・和宮の姿勢を市民に知らせる役割も果たしていた。

また一方では、薩長による版籍一部奉還の動きも流し、戦争進展のなかで「新政府」側の意図も掴むべく、まさしく「人の噂で飯を喰」っている情報屋としての面目をかけた活動を展開していた。

だが、藤岡屋の売り流す情報は、手書き写本としてであり、購入した者からまた写し広がるのは当時の常としても、木版印刷物で多量に刷るのに比べれば、所詮その情報が広がる範囲は限られたものであった。

では、木版印刷物による情報発信者の活動はどうであったか？

柳河春三は、かつて開成所の職務として、文久・元治年間に『日本貿易新聞』『横浜新聞』等の名称で横浜居留地発行の英字新聞「ジャパンコマーシャルニュース」を、続いて慶応二年まで「ジャパントイムス」を『日本新聞』の名称で、「ジャパンヘラルド」を『日本新聞外篇』の名称で次々と邦訳していたが、いずれも手書きで刊行はされず、幕閣に献本され、関心を持つものの間で回覧・筆写されるに留まっていた。戊辰戦争勃発の時点では、横浜の宣教師ベリーが邦字で木版刊行した『万国新聞紙』があったが、月一回が精々で、勃発後は正月下旬に第十集が出たまま三月下旬に第十一集が出るまで止まっていた。⁽¹³⁾

こうした状況下で、二月十四日・十五日に、慶喜自身の朝廷への謝罪・謹慎奏聞状が町中に触れ知らされ、市民が混乱状況に晒されたのである。『万国新聞紙』は間隔が長く、翻訳すべき外字新聞も少なくなり、西洋事情紹介の『西洋雑誌』木版刊行が主業務となっていた春三にとつて、東征軍が進軍し始めたとなれば、開成所で入手した市民の望む情報

を木版で刊行することは、ほとんど天与の責務と感ずる程であったに違いない。十日後の二十四日に『中外新聞』第一号が創刊された。

そのとき、春三のとするスタンスは如何なるものであるはずか？

実は慶喜東帰二日後の正月十四日、幕臣・佐幕藩藩士らの緊急会議が小川町開成所で開かれ、中心メンバーであった春三は老中稲葉美濃守正邦の「御尋」に応えた建白書を披露し、討議に参加していた。そこでは、「速に賊徒誅鋤海内寧静」して「東照宮様」の「御神霊」を慰めるといふ、対「賊徒」戦争を前提とした、次の五カ条を提言していた。

一、御府内近在を固めること。二、山海諸街道を固めること。三、紀伊・水戸・加賀・仙台・肥後など「神君様御恩沢」を存じている諸侯を動かす、大挙西征の行動に出ること。万一「名分小節」に拘り、この機を失したら「御家運も是迄」であること。四、外国に少しも権偽を用いず至誠を以て交際し、事変を隠さず実情を告げること。さもなくば賊徒が離間を策し大事に至ること。五、国事については貴賤の別なく、上様への直言が叶うよう、言路を開き衆論を採用すること。以上である。⁽¹³²⁾

春三が拘るなと強調（「小節」は二回）した「名分小節」とは何か？

対極の語に「東照宮様御神霊」「神君様御恩沢」があることでわかる。それは「錦旗」であり、「朝敵」とされたことである。朝廷に対して臣下の儀を尽くすのは名分であり節義である。だが、朝敵と烙印されたのは薩摩が欺瞞的に担ぎ出した錦旗によるものであり、そのような錦旗に象徴された朝廷権威に従うのは、一見名分のように見えても小節でしかない。徳川譜代なり徳川家臣なり、神君家康の御恩を蒙った家系の者は、欺瞞の錦旗に騙されず、機を失することなく、御府内近在・山海諸街道を守り固め、大挙西征の行動に出よというこの建白は、「先守後攻」論とはいえ、頼朝が僅か七騎にまで撃敗させられながら三年を経ずして六十余州惣追捕になったという故事まで引き合いに出し、「精神一注何事不成」と煽りたてる、凄まじい限りのアジテーションであった。

だがこの論理からは、慶喜が恭順の立場をとり謝罪歎願をした時、すなわち「名分小節」に拘った時点で「御家運も是迄」との判断が下る。だから既に二月には「大挙西征」は断念しており、賊徒を「官軍」と認めてしまった時点ではもつと決定的となる。勿論、その後に主君慶喜に従わずに「脱走」して戦う者にも、さらに後に全面抵抗戦争を構えることになる東北諸藩に対しても、根本で同情し、「あるいは」と期待したことはあったであろうが、単純に与することは最早あり得なかった。

ここに『中外新聞』のスタンスは定まる。「新政府」嫌悪を根底に据えつつ、反撃の機を失した以上軍事的抵抗は無益とし、外国交際を重視し、言路を開き衆論を採る政権が誕生すべく論陣を張ること、これを目標に掲げ、江戸市民が欲する情報を広く収集し、知らしめ、併せて市民自身の行動も報知すること、これであった。

第一号に掲載した、会津征討令は「仙台と会津との間を離すが為の謀」「此度の朝廷の決定は全く薩摩と長州との決議より出たる事なるべし」との京都及び長崎情報、根底の「新政府」嫌悪路線そのものである。第十号に載せた、会津重臣田中土佐らの「朝敵の汚名を被った今、死を賭してでも主君の雪冤を果たす」との「歎願書」は、武力抵抗の意志表明という点で基本的スタンスとズレがあるが、「薩賊」と対決するつもりであった市民には、是非とも伝えたい歎願書であった。また、第十二号では駒込以下町人惣代九十余名の歎願書全文を報じたのであった。『内外新聞』のスタンスも『中外新聞』とほぼ同じであった。第六号に、「北方大名悉く連合の様子、だが徳川家がこれを助けることはない」という、四月十日発行の「横浜新聞」を橋爪貫一訳で載せたが、これにより江戸市民は、列藩同盟が実際に成立するより一月半以上も前に、その動きと、変わらない徳川家の動きとの双方を知り得たのであった。こうしてD群情報発信者は、B群を嫌悪しつつも動きは伝え、A群の動きには共感・同情をもって伝え、C群市民・民衆の情報渴望に応え、

市民自身の声も報道したのである。まさしく、市民派新聞の誕生である。

この市民派新聞の誕生が背景の一つにあると考えられる事件が、四月二日、江戸町奉行所による市中困窮人への御救米支給決定であった。

「官軍御用の夜具・炭・油・蠟燭などが町方負担とされ、このままでは地借・店借にも出銀させざるを得ない、小前難洪の折、当面は七部積金を以て立て替えたので、町会所に沙汰していただきたい」旨の歎願書を、世話係名主共が町奉行所に出したのが二十七日、その五日後の四月二日、町奉行は官軍が江戸城に入る前日までに市中困窮人名簿を作り終え、出来次第順次提出して御救米の支給を受けよと命じた。市中困窮人への御救米支給は、名主たちの歎願に直接応えたものではないが、歎願書の背後に、「小前難洪」の嘆きがあるとみての決定であった。

四月、月番は南町奉行所であり、奉行は歎願書が出された二日前、三月二十五日に目付から転任したばかりの佐久間藩五郎信義である。⁽¹³⁾既に総攻撃中止が決まっていたとは言え、寛大処分の内容が駿府の大総督から一橋茂栄に伝えられたのは二十九日のことで、さらに江戸で幕閣から幕臣らに伝わるのは四月二日であるから、寛大処分が伝わる以前の人事であり、処分内容に関わらず、城引き渡し⁽¹⁴⁾官軍江戸繰り込みにとまなう町方統治を任され、その責を果たすための人事異動であった。

藩五郎が前任の目付に任じられたのは慶喜寛永寺謹慎日、二月十一日の役替え時であったから、この時すでに「新政府」恭順を前提に着任していた。⁽¹⁵⁾目付着任以来の恭順姿勢を絶対の前提とし、官軍江戸繰り込みによって生じる町方混乱の回避を託された藩五郎が、着任後直ちに出示された名主歎願書を読みつつ、官軍への飯米供出が江戸保管米に及ばないとも限らないと考え、官軍繰り込み以前に、江戸保管米を当面の生活に逼迫している貧民のために振る舞うことを決断したのであった。

新旧両権力の内乱的抗争のなか、旧権力側にあつて市民・民衆統制にあたつていた役人が、統治権の委譲を目前にし、かつての「薩賊」を含

む新権力に対するギリギリの抵抗として選んだ道が、自らが統治してきた市民・民衆の側に寄り添う政策の打ち出しであった。この決断の背景に、旧幕府諸勢力の動きを江戸市民・民衆の期待に寄せて報じていた、柳河春三ら市民派新聞の働きがあつたとみて良いであろう。

以上が、この時期江戸市民・民衆の意識をめぐる抗争の特質である。

註

- (1) 箱石大氏の「戊辰戦争と江戸の終焉―情報・宣伝戦としての戊辰戦争―」(『幕末ニッポン』角川春樹事務所、二〇〇七年十一月)は本稿と問題関心が近い。
- (2) 拙著『絵解き 幕末諷刺画と天皇』(二〇〇七年、柏書房、以下拙著A)参照。
- (3) 拙著Aで、天皇に対する呼称として「きんちゃん」または「きんばうちゃん」の語が⁽¹³⁾⁽¹⁵⁾⁽²⁰⁾⁽²⁹⁾に、判読符号としての「金」または「金将」・「金魚」が⁽³⁾⁽⁸⁾⁽¹⁴⁾⁽¹⁹⁾⁽²⁹⁾に使用されていること、また拙著『諷刺眼維新変革―民衆は天皇をどう見ていたか―』(二〇〇四年、校倉書房、以下拙著B)では、元治元年の浮世噺「当世子供雑談」に「京屋の金公」、慶応二年の「見立ているはたとへ」に「きん公」(共に孝明天皇を意味する)の事例があることを紹介しておいた(同書、二二七―二二八頁)。
- (4) 近世史料研究会編『江戸町触集成』第十五卷(二〇〇一年、塙書房)一五〇一五号。
- (5) 『江戸町触集成』第十六卷(二〇〇一年)一五四二―一五六各号。
- (6) 神奈川県県民部県史編集室編『神奈川県史』資料編10近世(7)(一九七八年、神奈川県)四七六―七七号、横浜市史編集室編『横浜市史』資料編五(一九九五年、横浜市)二八一号、石井良助・服藤弘司編『幕末御触書集成』第六卷(一九九五年、岩波書店)五四七―五四八各号。
- (7) 『江戸町触集成』第十八卷(二〇〇二年)一六六四五・五一・五六・六九各号。
- (8) 『江戸町触集成』第十八卷一七一九号・五一各号。
- (9) 『江戸町触集成』第十五卷一四四一七号。なお、この問題については拙稿「幕末の民衆と天皇」歴史科学協議会編『天皇・天皇制をよむ』(二〇〇八年、東京大学出版会、以下拙稿C)参照。
- (10) 『江戸町触集成』第十八卷一六八八一―二二二号。
- (11) 『江戸町触集成』第十八卷一六八八九号。
- (12) 『江戸町触集成』第十八卷一六八九〇号。
- (13) 『江戸町触集成』第十八卷一六九五三・五六六〇・六二各号。

- (14) 『江戸町触集成』第十八巻一七〇六五・六七各号。
- (15) 『江戸町触集成』第十八巻一七〇六三・六八・九各号。
- (16) 『江戸町触集成』第十八巻一七二四三号。
- (17) 鈴木棠三・小池章太郎編『藤岡屋日記』第十五巻（一九九五年、三一書房）二九〇～一頁。なお、本屋藤岡屋由蔵は「本由は人の噂で飯を喰い」と川柳にあるように、入手した情報を書くことを本業の傍らで展開しており、『藤岡屋日記』はその際の控え、というのが史料としての基本的性格であるが、入手・売り渡し順にその都度控えたものではなく、入手情報それ自体の、又は発信の月日に従って、後日に整理したことが明瞭に認められる。そのため、江戸情報はともかく、遠方情報に関しては、実際に入手し売り流した日よりかなり早い月日欄に整理されていることに留意しなければならない。註(32)・(81)・(101)参照。なお、藤岡屋については、吉原健一郎『江戸の情報屋』（一九七八年、NHK出版）参照。
- (18) 『藤岡屋日記』第十五巻三三三頁。
- (19) 『江戸町触集成』第十八巻一七二八五・九〇～九一各号。
- (20) 拙著A二三頁参照。
- (21) 『江戸町触集成』第十九巻（二〇〇三年）一七三〇四号。
- (22) 『江戸町触集成』第十九巻一七三〇三号。
- (23) 新訂増補国史大系『統徳川実記』第五編（一九七六年、吉川弘文館）三五五頁。
- (24) 『江戸町触集成』第十九巻一七三〇五・六・八・一〇・一五各号。なお、江戸の町兵については、原口清氏が『明治前期地方政治史研究』上（一九七二年、塙書房）二二頁で触れているほか、太路秀紀氏が『江戸の町兵』『論集きんせい』二二号（一九九九年、五月）で検討している。
- (25) 以上、江戸東京博物館史料叢書6『四谷塩町一丁目書役徳兵衛日録』（二〇〇三年、東京都江戸東京博物館、以下『徳兵衛日録』と略記）4頁、および『江戸町触集成』第十九巻一七三一九号。
- (26) 『江戸町触集成』第十九巻一七三二二号。
- (27) 『江戸町触集成』第十九巻一七三二五・三〇各号。
- (28) 『江戸町触集成』第十九巻一七三三一号。
- (29) 拙稿『太政官日誌』の発刊意図とその基本的性格——「新政府」による江戸民衆意識掌握に関する基礎的研究の一環として——『メトロポリタン史学』第4号（二〇〇八年十二月、実際の刊行は二〇〇九年三月、以下拙稿D）。
- (30) 拙稿D参照。
- (31) 第十二号までを合綴し、『江城日誌』の刊行宣伝を裏表紙見返しにすり込んで刊行した『太政官日誌』合綴本は私家蔵版。これは、後に第十号と第十一号の間を切り離し、当初合綴時の裏表紙とその見返しを第十号の終わりに付して合綴し直した形跡のあるもの。また、他の江戸での合綴本については国会図書館所蔵本、東京大学総合図書館所蔵本の各数種を調査した。なお拙稿D参照。
- (32) 『太政官日誌』第一号記事にある太政官代布告を『中外新聞』が報道したのは三月十八日第七号が最初だが、それが『太政官日誌』第一号を見てのものであるかは不明。『太政官日誌』八号までが柳河の元に送られてきたのは四月五日第十一号発行の直前である（本文後述、なお『太政官日誌』の記事概要については拙稿D参照）。また、藤岡屋は、京で『太政官日誌』の第六号と第七号とが在京諸藩に一冊づつ配布されたことを、それぞれ二十日、二十五日の項に記しているが、これは、後日に入手した情報をその記事の日付近辺に入れたもので、この情報をいつ入手したのかは不明であり、藤岡屋が『太政官日誌』を実際に見たかどうか不明である（『藤岡屋日記』第十五巻四九九・五〇一頁）。
- (33) 柳河春三に関する研究としては、尾佐竹猛の『新聞雑誌の創始者柳河春三』（一九四〇年、高山書院）が依然として基本的文献であり、近年は、山田英明『幕末・維新期における一洋学者の軌跡——柳河春三の思想的課題をめぐって——』（『史境』二〇〇〇年九月）がある。
- (34) 『西洋雑誌』は、前註尾佐竹の『柳河春三』と二冊セットで、一九八五年に『近代日本学芸資料叢書第九輯』として、湖北社より復刊された（解説植田満文）。
- (35) 『中外新聞』第一号（木村毅編『幕末明治新聞全集』3、一九六一年、世界文庫）一〇九～一二二頁。
- (36) 『中外新聞』は、この時期の印刷刊行物が通常は板木に彫る木版印刷であるのに対し、独自作製した木活字使用の印刷であった（尾佐竹前掲書参照）。
- (37) 以上、『江戸町触集成』第十九巻、一七三五七～九号。
- (38) 『中外新聞』第五号『幕末明治新聞全集』3二二～二頁。
- (39) 岩崎英重編『戊辰日記全』（一九二五年、日本史籍協会）一二六～七頁。
- (40) 勝部貞長他編『勝海舟全集』別巻1（一九八二年、勁草書房）一一八～九頁。註(38)に同じ。
- (41) 尾佐竹註(33)著、八四～五頁。
- (42) 拙著Aの巻末「戊辰日月表」および七九頁「諷刺錦絵解説方法」を参照。
- (43) 『藤岡屋日記』第十五巻三八一頁。
- (44) 「」は前田育徳会編『加賀藩史料』幕末編下巻（一九五八年、清文堂、以下は『加賀藩史料』と略記）の表記、「」は『藤岡屋日記』のみにある表記。
- (45) 『加賀藩史料』七三八～九頁。
- (46) 宮下和幸「幕末期における加賀藩京都詰の実態とその意義——日本歴史学会編『日本歴史』二〇〇六年五月。徳田寿秋「加賀藩主前田慶寧論——幕末維新期にお

- ける藩政動向再考」石川県立博物館「紀要」第十七号（二〇〇五年三月）。なお両氏とも、この慶寧親翰達書に触れている。
- (48) 太政官編纂東京帝国大学蔵版『復古記』第一冊（一九三〇年、内外書籍株式会社、以下『復古記』は同版による、但し各冊刊行年は略す）二七〇～一頁。なお、『前田慶寧家記全』慶応三年十二月十二日条「御届書」（東京大学史料編纂所データベース）および『加賀藩史料』十二月十二日条「宮北集書」記事、七二～三頁参照。
- (49) 宮下和幸前掲註（47）論文参照。
- (50) 『加賀藩史料』明治元年正月六日条「見聞袋群斗記」、七三八頁。
- (51) 『加賀藩史料』明治元年正月二日条「諸事留」記事、七三三頁。
- (52) 『加賀藩史料』明治元年正月五日条「御親翰帳之書拔」、七三五頁。なお、徳田寿秋前掲註（47）論文参照。
- (53) 『加賀藩史料』明治元年正月五日条「御親翰帳之書拔」より、土佐守在判内蔵太宛書翰、七三五頁。
- (54) 『加賀藩史料』明治元年正月六日条「横山政和覚書」、七三九頁。なお、宮下和幸前掲註（47）論文参照。
- (55) 『藤岡屋日記』第十五卷三八～九頁。
- (56) 『藤岡屋日記』第十五卷三八・三九三頁。
- (57) 『藤岡屋日記』第十五卷四〇～九頁。
- (58) 『江戸町触集成』第十九卷一七三〇六号。
- (59) 『藤岡屋日記』第十五卷三八九頁。
- (60) 『藤岡屋日記』第十五卷三九六頁。なお、翻刻の○印の日付は正月七日となっているが、その前の記事日付が正月二十六日とあることから、拙著Aでは「戊辰月日表」二十七日の項に入れたが、記事中に「九日暁出帆帰府仕候」とあること、その後十二・十三日の記事が多く続くことから、十三日ごろと修正する。
- (61) 『中外新聞』第十六号「幕末明治新聞全集」3一五七～八頁。なお、『復古記』第三冊中の「徳川茂承記」「毛利元徳家記」に、『中外新聞』記事中の「東山道」が「東海道」である他は全文が同じ、関東親征案を示した三月二十五日付の諸軍督励沙汰書がある（同冊、一一四頁）。拙稿D参照。
- (62) 『藤岡屋日記』第十五卷四七五頁。
- (63) 『中外新聞』第八号「幕末明治新聞全集」3一二九～一三〇頁。
- (64) 『藤岡屋日記』第十五卷四三〇頁。
- (65) これらの動きについては、拙著Aの巻末「戊辰月日表」に纏めてある。
- (66) 『藤岡屋日記』第十五卷四八九～四九〇頁。
- (67) 『藤岡屋日記』第十五卷四九一頁。
- (68) 『藤岡屋日記』第十五卷四九一頁。
- (69) 『藤岡屋日記』第十五卷四九一頁。
- (70) 東叡山寛永寺「慶応四戊辰年間伝聞記」（東京大学史料編纂所蔵復古記原史料『寛永寺記』乾 正月十八日条。「続徳川実記」第五編、三六二頁。
- (71) 日本史籍協会編『静寛院宮御日記』一卷（初版一九二七年、一九七六年覆刻、東京大学出版会）六～七頁。
- (72) 「慶応四戊辰年間伝聞記」『寛永寺記』乾、二月二十一日条。「寛永寺年行事雜簿」日本史籍協会編『維新日乗纂輯』五卷（初版一九二八年、一九六九年覆刻、東京大学出版会）五〇七頁。
- (73) 『藤岡屋日記』第十五卷四七六頁。
- (74) 『藤岡屋日記』第十五卷四七六～七頁。
- (75) 「寛永寺年行事雜簿」・「寛王院義親戊辰日記」『維新日乗纂輯』五卷五一・三六五頁。「慶応四戊辰年間伝聞記」『寛永寺記』乾三月二十日条。
- (76) 「中外新聞」第八号「幕末明治新聞全集」3一二〇頁。
- (77) 「中外新聞」第七号「幕末明治新聞全集」3一二八頁、またこの歎願書全文が四月になつてから「中外新聞外編」卷之二に掲載された（『幕末明治新聞全集』3、二五七～八頁、なお『復古記』第二冊、六四八～九頁に、「弁事局記」「堀田正倫家記」記事として全文が掲載されている。
- (78) 『徳兵衛日録』一五頁。
- (79) 東京都編纂『東京市史稿』市街編第四十八（初版一九五九年、二〇〇〇年復刻、臨川書店）七四四～五頁。
- (80) 「中外新聞」第九号「幕末明治新聞全集」3一二三四頁。
- (81) 「中外新聞」第十号「幕末明治新聞全集」3一三五～六頁。この田中土佐ら会津藩家老の歎願書も藤岡屋は掴んで流しているが、これについても歎願日付が二月とあることで二月纏めに整理してあるため、藤岡屋がいつ情報収集し流したものは不明である。なお、『戊辰日記』によれば、この哀訴状は、会津藩小野権之丞から中根雪江を経て、京にいた春嶽のもとに、二月十八日に来たものであり（『戊辰日記』二〇三～五頁）、『復古記』第二冊には、春嶽が提出した十九日の項に収められている（『復古記』同冊、四二四～五頁）。本文一の3で触れたように、春三は後には春嶽と親交があったことが判明しているので、あるいはこの時にもすでに接触があり、春嶽・雪江のラインから、直接入手筆写していたのかもしれない。
- (82) 『江戸町触集成』第十九卷一七三九八号。
- (83) 『江戸町触集成』第十七卷一六一三二号、安政五年八月は大の月。
- (84) 『江戸町触集成』第十八卷一六九六七号、慶応元年六月は小の月。
- (85) 『復古記』第三冊二八三～四頁。
- (86) 日本史籍協会編『橋本実梁陣中日記』（初版一九二九年、一九七三年覆刻、東

- 京大学出版会）四二六～七頁。『復古記』第三冊二八二～九頁。
- (87) 『復古記』第十一冊八二〇～一頁。
- (88) 「中外新聞」第十一号「幕末明治新聞全集」3一三八頁。ただし、この「中外新聞」第十一号の報道では「大総督に渡した」ことになっているが、『復古記』第二冊六四九～六五〇頁の「堀田正倫家記」によれば、「遂ニ上ルコトヲ果サス」とあり、大総督にも渡らなかつたと読める。なお、原口清「江戸城明け渡しの一考察」著作集3『戊辰戦争論の展開』（二〇〇八年、岩田書院）二八八頁および三三五頁註（38）参照。
- (89) 『静寛院宮御日記』一卷二九～三〇頁。また『復古記』第九冊四八二頁「徳川義宜家譜」にも「静寛院宮ニハ清水館へ御移転」とある。『続徳川実記』第五編四一九～二〇頁には、和宮は「田安館」に移ったと記されているが、五日に田安慶頼から移転先が増上寺と告げられたことに對し、官軍宿陣であることに不安を覚えた和宮が清水館にしたい旨申し出、検討の末、七日に「清水に治定」と和宮自身が記していること。また、本来の田安館は慶応元年閏五月に火災に遭っており（『静寛院宮御日記』二卷三二六頁）、以来、田安家の一部が清水館に移っていたこともあり、建物としては清水館が正しいものと思われる。
- (90) 『江戸町触集成』第十九卷一七三九頁。
- (91) 「内外新報」第一号「幕末明治新聞全集」4（一九六一年、世界文庫）八六～七頁。なお、拙稿D参照。
- (92) 『橋本実梁陣中日記』四四三頁。「内外新報」第六号「幕末明治新聞全集」4九九頁。『復古記』第十一冊四六三頁。なお、『復古記』所収の、橋本・柳原発若倉具定・具経宛十一日付書翰には「本日朝」とあるが、その元となった「徳川家臣届出」が「橋本実梁陣中日記」にあり、参陣した徳川家来の報告として、「昨夕より今朝に至、歩兵二千人計脱走仕候」と記されていること、また後日の報道ではあるが、歩兵屯所に比較的近い、小石川・小日向を本拠地にしていた橋爪貫一の「内外新報」の記事が「四月十日の夜」とあることで、本文のように記した（橋爪貫一の活動根拠地については、箱石大氏が二〇〇九年一月三十一日に明治維新史学会例会で報告した「戊辰戦争研究のための官版日誌・新聞史料論」の【付表】による。なおまた、原口清註（88）論文、著作集3三二五頁参照。
- (93) 日本史籍協会編『徳川慶喜公伝』史料編3（初版一九一八年、一九七五年覆刻、東京大学出版会）四三二～二頁「浅野氏祐手録」より。
- (94) 『復古記』第三冊四八九～四九〇頁・第九冊四八二～四九二頁。
- (95) 『太政官日誌』第十一号記事（国会図書館憲政資料室蔵、京都村上勘兵衛版）。
- (96) 『江戸町触集成』第十九卷一七四〇一頁。
- (97) 『復古記』第三冊四九八～九頁。「海舟日記」II『勝海舟全集』19（一九七三年、勁草書房版）44～45頁。『静寛院宮御日記』一卷三〇～三一頁。
- (98) 『復古記』第十一冊四六四～五頁・同冊八三八～九頁。
- (99) 『復古記』第九冊五三二頁。
- (100) 『江戸町触集成』第十九卷一七四〇三頁。
- (101) 「中外新聞」第十三号「幕末明治新聞全集」3一四六～九頁。これは、二月十一日付の仙台藩主伊達慶邦の願書。十四日に家老大條孫三郎が仙台から船で持参、二十六日に京に参着したが、既に京在住の藩兵らが会津征討のために帰藩させられた後のため、建白なし得なかつたもの（『復古記』第二冊五三八～五四〇頁）。なお、藤岡屋日記」には、建白日付の二月十一日の項に整理されているため、実際の情報収集販売日は不明である（同第十五卷四五〇～一頁）。
- (102) 『復古記』第九冊五三二～三頁。
- (103) 『静寛院宮御日記』一卷三〇頁。
- (104) 『復古記』第九冊五三二頁。
- (105) 『静寛院宮御日記』一卷三二頁。
- (106) 日本史籍協会編『熾仁親王日記』一卷（初版一九三五年、一九七六年覆刻、東京大学出版会）三二頁。『幕末御触書集成』第六卷六四八四号。『復古記』第十一冊四七〇～三頁。
- (107) 四月十三日、撤兵隊指図役川端助次郎らが上総久留里藩領内木更津に屯集した旧幕兵を代表し、君津城に「挨拶」、久留里藩は川端らに玄米百俵を渡す。十五日には福田八郎右衛門道直を頭とする「義軍府」が木更津を本営とし、凡そ三千二百名を結集して軍規を決め、関東各地に「遊説」を開始。こうした状況下、十七日には先鋒総督参謀が津・大村両藩兵に出陣を命じ、房総諸藩に兵の応接を命じている。（『復古記』第九冊五九一～三頁・同十冊九一七～九二六頁）。
- (108) なお、すでに二月・三月に脱走した旧幕府兵の関東各地での行動、それらと四月十日以降の脱走兵の動きなどについては、原口註（88）著「二四～一四二頁、石井孝『戊辰戦争論』（一九八四年、吉川弘文館）一四六～一五一頁などを参照。四月十三日、南町奉行所は「御城近辺并市中」の取締りのため、これまでの別手組に加えて「狙撃隊」を「見廻り」させることを決め、年番名主が請印したが、これが十六日になってやっと組合年番から各町名主へ通達されている（『江戸町触集成』第十九卷一七四〇八頁）。この遅延は意味深長である。十二日に騒擾状態に入った歩兵を十四日昼過ぎによく鎮静できた状況下では、「新政府」に協力している田安慶頼配下の狙撃隊とはいえ、騒擾状態の歩兵と歩調を合わせないとも限らず、その危険が去るまで保留したものと思われる。
- なお、江戸・関東情勢が如何に不穏な状況にあったかについては、大総督府参謀であった林玖十郎（得能重斯登）が、四月十七日付で京都の副総裁と軍防局宛てに出した長文の陳情書翰によく表れている。林はそこで、「実ニ不易難事ニ御座候」「実ニ多端、沌モ難行届」「総テ難事與々一同苦心イタシ」といった、

- ほとんど悲鳴に近い文を認め、参謀二名の追加を願っている。追加は、二十五日付け返信で認められている。以上『復古記』第三冊七四～七頁。
- (109) 「内外新報」『幕末明治新聞全集』490～92頁、なお、記事中「」での補足は、『復古記』第十一冊三四〇頁所収の「松平忠敬家記」による。
- (110) 事件そのものについては、『復古記』第三冊一四〇頁参照。
- (111) 拙稿D参照。発刊の遅れはロシアウズリ地方の地図板刻に手間取ったため。なお、柳河春三のロシアへの関心については、註(33) 山田英明論文参照。
- (112) 『徳兵衛日録』十八頁。但し塩町では書類不備があり支給は十三日になった。
- (113) 以上、『中外新聞』第十二号『幕末明治新聞全集』314～16頁。『復古記』第十一冊四五～五六頁に、「中外新聞」記事からこの歎願書が収録されている。また、神田孝平「日本国当今急務五カ条の事」に関しては諸先学も触れており、原口清氏の、「戊辰戦争が」新しい近代日本建設の知的要素も成長させた」との視点は、本稿視点の一つに共通している(原口註(88) 書、二〇三頁)。
- (114) 以上、『内外新報』第四、第五、第六号『幕末明治新聞全集』493～99頁。
- (115) 「内外新報」第七号『幕末明治新聞全集』410頁。
- (116) 『太政官日誌』第九号(国会図書館憲政資料室所蔵、京都村上勘兵衛版)。「復古記」第三冊二七三頁。拙稿D巻末表I「太政官日誌」記事概要総覧参照。なお、廻米拒否については『復古記』第九冊四〇五頁。
- (117) 拙著Aでは、「当世三筋のたのしみ」(『稽古所の賑ひ』(③・④)の板刻は四月上旬としたが、この『中外新聞』記事が背景にあると考えられるので、四月中旬～下旬と訂正しておく。
- (118) 「中外新聞」第十四号『幕末明治新聞全集』315頁。提出の経緯については『海舟日誌』II四二頁参照。なお『復古記』第三冊四九四～五頁にもあるが、『太政官日誌』十一号からの収録であるため、四月十一日の項に入っている。
- (119) 原口註(88) 著三二二頁参照。
- (120) 橋本・柳原両勅使の宿陣は、十三日に池上本門寺から三田の有馬藩邸に移った。
- (121) 『橋本実梁陣中日記』四五〇頁、拙著A巻末の「戊辰月日表」参照。
- (122) 「江戸町触集成」第十九卷一七四～一七号。この「演舌」が二十五日に改めて町触として出され、名主から「下々」まで「耆人別」に申し聞かせるよう徹底された。
- (123) 『熾仁親王日記』一卷三四頁。『復古記』第三冊七六九頁。
- (124) 国会図書館古典籍資料室所蔵『江戸時代落書類聚』卷三十六「幕府瓦解」巻一。
- (125) 拙著Bでこのパロディー歌を詳説したところ、ある公式の席で、尊敬する著名な維新研究者から、「当時の皇族など上流階級の者が、幼少時に決められていた許嫁関係を破棄されたからといって、それを何時までも未練に思うことなどはない」といった角度からのご批判をいただいたことがある。もちろんこれは江戸の市民が詠ったパロディー歌、遊びであり、作った者自身も有栖川宮や和宮が今でも未練を抱いている、と本気で思っていたわけではないし、まして私は、有栖川宮が未練を抱いていた、などと主張するものではない。かつて許嫁であった和宮が將軍夫人として居た城に、今、占領軍の大総督として入る、という歴史の皮肉が、庶民の視線からは格好のパロディーの素材となったのである。そこに、錦旗に天皇權威が象徴されていることを見抜いた市民が、春道列樹の歌を振ることと笑えることに気づいて作ったのがこの歌なのである。拙著Aで紹介した戊辰戦争諷刺錦絵にも三点、「当世三筋のたのしみ」(③)と「浮世風呂」(⑥)と「忠臣蔵九段めかけ合せりふ」(③②)に、この遊び心がある。(③)⑥)では、有栖川宮大総督と和宮がかつて許嫁関係にあったことを、諷刺主題とは別に、ほんのちよつとした遊びとして画像に取り入れただけであるが、(③②)では、有栖川宮はまだ未練があつて和宮に迫るが、和宮は「貞女両方にまみへず、たとへ夫に別れても」という、忠臣蔵《小浪》の台詞で断るという形で、和宮の徳川方に留まって家名を守る意志を伝えている(拙著A二〇一～二頁参照)。
- (126) 「江戸時代落書類聚」卷三十六「幕府瓦解」巻一。拙著B二四六頁参照。
- (127) 早稲田大学演劇博物館蔵、かわら版「都風流トコトヤレぶし」上の歌詞。
- (128) 「中外新聞」第十五号『幕末明治新聞全集』315～16頁。
- (129) 「大日本維新史料稿本」第四部第二稿三千二百二十七、明治元年二月是月、(東京大学史料編纂所データベース)。
- (130) 「内外新報」第九号『幕末明治新聞全集』410～17頁。
- (131) 「復古記」第十一冊二六九～七〇頁。
- (132) 以上、註(33) 尾佐竹著、『幕末明治新聞全集』1・2の解題、および「万国新聞紙」『幕末明治新聞全集』2397頁参照。
- (133) 以上、明治文化研究会編『新聞叢書』(一九三四年、岩波書店)四二～三頁。
- (134) 『続徳川実記』第五編四二二頁。月番は「江戸町触集成」第十九卷による。
- (135) 『熾仁親王日記』一卷二四頁。『続徳川実記』第五編四二四頁。なお、原口註(88) 著、三一六頁参照。
- (136) 『続徳川実記』第五編三八一～二頁。因みに、鑄五郎と共に目付に任じられた河田相模守はそれまで開成所頭取であり、柳河春三の上司であった。
- (137) (跡見学園女子大学文学部、国立歴史民俗博物館共同研究員)
- (138) (二〇〇九年七月一五日受付、二〇一〇年一月一三日審査終了)

Another Boshin War : Feud over Political Awareness of Common People in Edo, Part 1

NAGURA Tetsuzo

Most citizens and common people who lived in Edo during the Boshin War showed a rejective response to the Tosei Army stationed in Edo. “The new government” had no choice but to suppress and rebuild the political awareness of the Edo citizens, and a fierce feud between the two parties developed. This feud, different from the Boshin War fought between the old and new powers, is another Boshin War. This article sheds light on the other Boshin War from the viewpoint of historical public thought. However, this article is limited to the period between January 12th when Yoshinobu returned to Edo and April 21st when the governor general entered the castle, and analyzes the events that happened in front of the eyes of the Edo citizens during that period, and reveals the characteristics of the feud over the awareness and thought of the Edo citizens.

While moves by assorted influences of the old feudal government varied, the petition by Makino Yasumasa, the lord of Komoro domain, stood out. He insisted on one theory alone that he would serve the Imperial court by serving the Tokugawa family as vassal, and stuck to the idea that he could not send his army to subjugate Yoshinobu even though it was the order of the Imperial court. He even petitioned fearlessly to “compensate the delinquency of the Imperial court” by rejecting the dispatch of troops. This theory was displayed before the nose of the Edo citizens on the day when the Governor General entered the castle.

On the one hand, through the whole process of the Tosei Army entering Edo, the burden of the Edo citizens suddenly expanded. Owing to this, the principle whereby the Imperial court would rescue “the nation’s terrible suffering” collapsed, and “emperor’s nation” became a null word.

Town people in Edo requested the magistrate’s office improve the situation whereby even the lower class people had to share the burden of the entrance of the Tosei Army to the castle. On April 5th when the needful cost mounted, approximately ninety town officials submitted a petition to spearhead force lodging.

On the other hand, although having an aversion to “the new government” from the bottom of his heart, Yanagawa Shunsan assumed that military counteraction would have no benefit, and since the end of February continued to issue the “Chugai shimbun,” a civil newspaper emphasizing relationships with foreign countries and speech.

Supported by the civil newspaper, Sakuma Bangoro, the Edo magistrate’s officer, decided to supply impoverished people in the city with rice on April 2nd. Just before turning over sovereignty, as a last-minute resistance against the new power, he adopted policies siding with the citizens and common people.

Described above are the characteristics of the feud over the Edo citizens and common people's awareness during this period.

Key words: Boshin War, Awareness and thought of the Edo citizens, Civil newspaper